
メイの冒険

青海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイの冒険

【Zコード】

Z9776D

【作者名】

青海

【あらすじ】

メイが目を覚ました時、たくさんの小人に囲まれていた。突然迷い込んでしまった異世界で、お前は「精霊の愛し子」だと言われる。出会いと絆。小さな少女が周りに助けられながら精一杯の知恵と勇気で冒険するファンタジー冒険小説。現在はドワーフの森で修行中。

第一話 初めの第一歩

「さやーー！」

長いまつげに縁取られた薔薇色の大きな目の幼い少女は目を覚ましたとたん大声をあげた。

「パパア！ママア！なんか知らない人が、いっぱい……？」

少女が驚くのは無理もない。両親を探すように周りを見回してみると彼女が眠っていたベッドを取り囲むように10人ほどの白雪姫に出てくるような小人達が取り囲んでいたのだ。

「ええ？ な、なに？」 小人さん？ それも10人？ それじゃ3人多すぎるよ…… 小人さんは7人じゃないと？」

少女はまだ寝起きなので、混乱していた。

よくわからないがこの小人さんたちは恐ろしい顔などしていいない。ちょっと不安はあるがとりあえず、朝起きたときの習慣で無意識のうちに手になじんだ感触を探して手を伸ばした。彼女はすぐに探していたものを見つけて抱きしめた。三つの誕生日にもうつてからずつと一緒にいるクマのティティ。

「いっ！ いたあい…… ママア…… どこにいるのよ」

急に動いたからか全身がひどく痛んだ。なんだ、この痛み？ どうして知らない間に怪我をしているのだろう…… 骨でも折ったのだろうか。少女は不思議に思ったがあまりの痛みに涙がにじんで、手に持っていたティティをぎゅっと抱きしめ母親を目で探した。

『@%%#』

明らかに母親ではないと少女にはわかつていたが、女の人の声が聞こえて振りむくと、一番小柄でスカートをはいた小人さんが動いちゃだめよ、とでも言つよう少し眉間にしわを寄せながら、さつと手を差し伸べてその小さな少女がベッドに落ち着くのを手伝ってくれた。なんとなく、声が出なくて頭を下げる彼女の眉間にしわが少し和らいだ。

『%\$**\$##%?』

不意に少し渋い低い声が聞こえて少女は見てみると、中でもめがねを掛けた小人が少女のほうを見ていた。少女は思わず息をつめた。めがねの奥に聰明そうな光をたたえた目で何かを確認するように彼女を見やり、その後一言周りの仲間達になにかを言つた。そうすると、今少女を手伝ってくれた女人を除くほかの小人達はしづしづといった様子で後ろに下がつた。とはいっても小さな同じ部屋の中で、興味と不信が半分半分といったような面持ちでまだじつとこの小さな女のことを観察するように見ていたのだけれど。それでもすぐ間近に迫られていなければ少し圧迫感も和らいで少女は思わずほーっと息を吐いた。どうやらそのめがねの小人が少女が怯えてると思ったのか、少し離れていろとでも言つてくれたようだ。

少女はとりあえず、ベッドの周りを取り囲まれていた状況からは解放されて、やっと周りを見回す余裕が出来た。少女は今まで寝ぼけててつくり自分の部屋のベッドに寝てるものだと思ってたのだが、実はぜんぜん見覚えがない部屋にいることにやっと気づいた。そのことに不安になつて両親を探すが周りにはこの10人の小人たちしかいないようだ。少女の家は東京の郊外にある現代的な二階建

ての家である。ログハウスと言えば聞こえはいいが、丸太を切り出して組み立てたようなこの家とはまったく違う。

ベッドから見える窓の外には森が、遠くには高い山が見える。どこか観光地の別荘にいるのだろうか。というか、なぜこの小人さんたちと一緒にいるのかがまずわからない。……まさかこの小柄な彼らは誘拐犯なのか？背は小人といつていよいほど小柄で、昨日6歳になつたとはいえ、同年代の他の子達と比べ少し成長が遅めのこの少女よりも頭ひとつ分ほどしか高くないようだ。しかし、体つきは少女の腰よりも太い上腕をもちこの小さな少女など簡単に運べるほどの力持ちに見える。とはいえ、めがねの男の人や先ほど支えてくれた女人人がいるように悪い人たちには思えない。

少女には自分がなぜここにいるのかまったくわかつていなかつた。昨日の夜はきちんと自分の部屋のベッドで寝たはず……、と考えて、そういうえば昨日は6歳のお誕生日のお祝いに家族みんなで食事に出かけて、あまりの楽しさにはしゃぎすぎてその後車の中でもうとうとしてしまつたな、と思い出した。いつおうちに帰つたのかも覚えていない。

「あれ？わたし家に帰つてないのかな？」

なにかがおかしい。なぜ覚えてないのだろう。それにしても、体中に感じるこの痛み、ひどい怪我ではないみたいだけど、あちこち動かすのが痛い。骨折はしてなくともひびでも入つてたらと思うと余計に両親が恋しくなつた。でもこんな怪我をいつした……？

自分の両親はいつたいどこののかひどく、嫌な予感がしてそれ以上考えたくないような気がした。

『@#\$%%\$』

そのまま少女が物思いに沈んでいると、また何かめがねをかけた小人が言つたが、今度はどうやら芽衣に話しかけていたようだ。

少女は何を言われているのか言葉はまったく意味はわからなかつたが、その小人が辛抱強く少女の返事を待つてているような気がして、弱つてしまつた。

「あの、なんていつてるかわかりません……」

その小人は少女が声を発すると少し驚いたように目を見開いた。

「あの、それよりも私のパパとママを知りませんか？ ここがどこだかわかりませんが、すごく心配してます。あ、あの……？」

少女は何とか伝えようと身振り手振りで話しかけたがわかつてもらえた様子にはなかつた。眼鏡の小人は後ろを振り返つて何事かを他の仲間達に話した後、それから少し考えるような顔をして、自分の胸をたたき、

「ゼノン」

とはつきりゆつくり言つた。その後、少女の方を指差し首をかしげる動作をした。

「ゼ、ゼノン？」

少女は意味もわからずそのまま繰り返したがその小人がうれしそうに首を何度も縦に振りながら自分の胸をたたいているのを見て、はつと気が付いた。

「ゼノン」

少女は今度はゼノンを指差しながらそういって。そしてその後自分が胸をたたいて

「芽衣」

「というと、伺うように小人を見た。

小人のゼノンは良くできました、といつぱりにうなずいて、少女芽衣を指差し、

「メイ」

といった。芽衣もうれしくなつて何度もうなずいた。

そうだ、言葉がわからないならまず何とかこの小人さんたちとお話をできるようにならぬとどうしようもない。

両親と初めて離れ離れになつたことに不安で一杯だったが、今は出来ることをするしかない。

その後、その10人の小人たちにそれぞれ名前を言つてもらい、芽衣はやつと微笑んだ。

第一話 言葉のレッスン

ゼノンは人間の成人した男性より随分背の低い小人達の中でも更に小柄で、芽衣よりも手のひらひとつ分ほどしか大きくなかった。どちらかといえば物静かな学者のような雰囲気と好奇心のいっぱいの楽しそうな目が印象的だけど、白雪姫に出てきそうなふわふわの長いひげを生やしていた。歳はいくつ位のかはメイには判断できなかつた。長いひげはお話とは違つて白くはなく、木の幹のような茶色をしていた。あの初めてあつたときに一緒にいた十人の中では小柄なほうではあつたが、とはいえ、頑丈そうながつしりとした手足をしていて、腕の太さは芽衣の腰周りほどもあつた。

芽衣がゼノンと初めて言葉をかわしてから、女人の テーノ と テーノ といふ名前でゼノンの奥さんであることがわかつた。 テーノ をのぞくほかのドワーフたちは芽衣の事は彼に任せることに決めたようで、ほとんど見かけることはなかつた。

芽衣は自分が寝かされているのがどうやらゼノンのおうちらしいことがわかつた。少しからだが良くなつてからクマのテディを連れて外からおうちを眺めて見ると、その家は森の中でも奥の方にあり、小さな赤い屋根の可愛い丸太のおうちだつた。

「かわいーー見てー！ テーデイ！ 素敵だね！」

芽衣はママに寝る前に読んでもらつた白雪姫の絵本の挿絵のよつな世界にすっかり感激した。

「こんな可愛いおうちに住めるなんてとっても素敵。でも、パパとママ、こつたいどこに行つちやつたんだろう…。きっと私のこと

探してゐるに違ひないよな。

芽衣は両親のことを思ひ出して涙ぐみそうになるのをぐつとひらめた。

ないたつて仕方ないよ。この小人さんたちは芽衣にとつても親切にしてくれている。まだ言葉がうまく通じないので、いまいちどういう状況だつたかはわからぬにけど、怪我をしていた私のこと、助けてくれたみたいだし。

芽衣はもうこの小人達が自分の事を誘拐したのかもとは考えていなかつた。

芽衣のことをまるで自分の子供のように熱心に世話をしてくれるゼノンたち夫妻の様子を見ていてもそんなはずがないことはわかつてゐた。

それにしても、芽衣にとつてありがたいことにゼノンは驚くほど辛抱強くとても優秀な先生だつた。その上に芽衣もまた熱心な生徒だつたことがこの語学学習にとてもいい影響をした。

芽衣にとつては両親に会えるための近道はこの言葉を習つて何とか両親のことを聞きたいという強い願望があつたからだつた。

芽衣は初めて親元を離れて今まで自分が生活していた中で当たり前にあつたものがないことが初めはとても不便に思えた。普段使つていた自分専用のノートパソコンがあればいいが、そんなものは持ち歩いていなかつた。もしあつたとしても、充電ができないのであまり役には立たなかつただろう。そんなことを考えていて、そういうえばと気が付いた。

芽衣はテディのおなかの部分のチャックを開けて中から小さな鉛筆とノートを出した。

お気に入りのテディはいくつか隠しポケットが付いていて、背中に

背負つリュックにもなる。

芽衣はその晩、何とか覚えた大事な単語を忘れないようつたない手つきで幼稚園で覚えたひらがなで書いた。ノートはまだまだペジはあつたけど、他に代わりになるものがないので、無駄にしないよう普段は外で何度もむき出しの土の上に棒で書くことで工夫してみた。

ゼノンはある日芽衣が（ゼノンの日から見れば）いつも簡単に文字らしきものを地面に書いているのを見て内心ひどく驚いていた。ゼノンにとつては人間のまだ幼い少女が当たり前のように文字を書いているのが信じがたかった。なので、その丸みを帯びた文字は初め文字だと気付かず、ただの落書きかと思い込んでいたのだ。

ドワーフ族の中でももつとも知識が深い自分ならまだしも人間族でこのように文字が書けるものは身分の高いものか、魔法使い達くらいではないか。ましてやおそらく生まれて5、6年ほどの子供がこれほどいともたやすく文字を操るとは…。いつたいこの子はどこから迷い込んできたのだろう。

ゼノンはこの奇妙な子供を見ながら、メイに初めてあつたときのことを思いだしていた。

最初に倒れたこの子を森で見たときはあまり仲の良くないエルフ族の者かとおもい、そのまま通り過ぎようとしたのだがなにかが引つかかって近くまで行つてみると、なんと人間族の子供のよつだつた。

からだはわから誇り高きドワーフ族とは似ても付かず貧相で、弱弱しく、こんな体でよくもこの森のこんな奥までやつて来て生き

てこれたものだというのが初めの感想だつた。

それが、自分の家につれて帰り、怪我の手当をテーケーに任せて森のほかのドワーフ族の長老連中にそのことを報告すると、やつらは近くでその子を見てみたいといい、ついてきた。

自分もその子にというか、トレードでくる商人たちを除いて中原の方まで出ないと見ることがほとんどない人間族に興味があつたので反対もせず家に招きいたが、メイが起きたとたん、叫び声をあげてそのあどけない顔をあげたとき初めてこの子が背の高さは大人のドワーフとそう変わらないとはいえ、人間族としてはおそらくまだ幼い小さな子供だということに思い至つた。

そのことが、不思議とこの弱弱しい小さな人間の子供を何とかしてあげたいという庇護欲のようなものを覚えさせたのだろう。小さな頃から独立心が強く、すぐにひとり立ちする子供を持つドワーフ族としては珍しく、ゼノンとテーケーはこの小さな子を守つてあげようと決めた。

芽衣はまだ気付いていなかつたが、ゼノンに拾われたことは芽衣にとつて本当に幸運だつた。

ゼノンにとつて驚くことにこの子供には中原でも使われる共通語が通じなかつた。いつもトレーディングに来ている人間族とはまったく無理なく会話ができるのに、これはどういうことだらうか？人間族でも僻地に住むものはまた違つ言語を使うのだろうか？

ゼノンは興味がでて詳しく聞いたが肝心の言葉が通じないので仕方がない。まずは名前からと自分で名乗り、なんとか彼女の名前がメイであることがわかりほつとした。長老連中はすでにこの言葉もわからない子供に興味をなくしたようで私にこの子のことは一任することだつた。

少しずつだ。これから少しずつ言葉を教えてあげよう。親元に返すにしてもここから人間族が住む中原までは険しい道だ。言葉を教

えると同時に、森でも生活ができる程度に鍛えてあげないと、このままでは一冬を越すことも難しいだろう。

いや、まだ今は春だ。まだ時間はある。ゆっくりと教えてあげよう。

ゼノンとテーノは自分達の子供達が巣立つてから久方ぶりに暖かい家庭が帰ってきたような気がしてうれしくなった。

芽衣の怪我も含めた衣食住の世話をずっとしてくれていた、ゼノンの奥さんのテーノとのやり取りは芽衣の語学力を気付かぬうちにさらに向上させた。テーノは今年小学校に上がる予定の芽衣よりも少ししか大きくなかったがそれでもドワーフらしく力が強くてきぱきと芽衣の面倒を見てくれていた。

芽衣は初め、この無口だと思つていた女の人気が少し怖かったが、まだ言葉もあまりわからず、両親が恋しくてティを抱きしめながらこつそり泣いていたところをテーノは気付いて、ティごとそつと抱きしめて眠つてくれてからテーノのことが大好きになつていた。両親と離れ離れの幼い少女はゼノンとテーノに両親の面影をぼんやりと求めていたのかもしれない。

いつもお礼を言いたがつたが良くなかったが初めてありがとうをゼノンに教えてもらつた夜、テーノに使つとテーノは少し涙ぐみながら抱きしめてくれた。

「通じた！」

それが一番の「」褒美となり、芽衣は言葉を覚えることが楽しくな

つた。

言葉を学ぶとき、実際の生活の中で間違いをおかしながら、新しい言葉を当てはめて使っていき、周りの人に大きさに褒めてもらうことが一番の近道であり、赤ん坊が覚えていくのと同じやり方だ。その上、芽衣は赤ん坊ではないので、文法や、新しい単語の理解も早く、どんどんと言葉をマスターしていった。

芽衣はほじなく、ドワーフ族との交流をするのに問題ない程度まで言葉が話せるようになつていつた。

第二話 一つのお月様と勇気

芽衣はテーノが整えてくれた自分のために用意された部屋で夕飯までの間一人で物思いにふけっていた。

芽衣はいつも忙しい両親を煩わせないようについつも、自分の事は自分でやろうとするまだ6歳の子供にしては少し大人びた考え方のできる少女だったので、少し心が落ち着いてから、冷静に自分の状況を分析しようとしていたのだ。

思い出せるのは普段は忙しく食事もあまり一緒にできない両親がふたりとも一緒に誕生日を祝ってくれたことだつた。芽衣の父親は大きな商社の営業マンで、仕事がいつも忙しくて帰宅は早くても芽衣がもうお風呂に入つて眠る前がほとんどだつた。母親は元モデルの有名なデザイナーで、洋服をデザインしながらその服を扱う店も経営していてパパよりは早く帰つてくるとはい、夕飯を一緒に食べることは月に数度程度だつた。

普段ならお手伝いの真鍋さんと一緒に作つたお夕飯を一人でテレビを見ながら食べるのだけど、誕生日は特別に一人が早く帰つてレストランに連れて行つてくれた。

大好きなフルーツがいっぱい乗つたケーキを三人で仲良く分けて食べただけど、それがすうごく美味しくてもつと食べたいなつて顔をしてたんだと思う。

余つた分はまた明日食べていいつてが言つてくれたのがすうごくうれしくて明日が楽しみだつた。

プレゼントには一人からはきれいな青い丸い珠が付いたネックレスをもらつてそれがなんだかお姉さんになつたみたいでうれしかつたのを思い出した。

いつものように胸元を探るとネックレスはママにつけてもらつたまま首元にあつた。

パパ、ママ。

レストランから出たその後は普通なら両親が、テディを抱きしめたまま車で寝てしまつた芽衣をそのまま寝室まで運んでくれていたことだらうけど、なぜか目が覚めた場所は小人達のおうちだつたので、どこではぐれてしまつたのかまったくわからない。

いつたいどうやってここに迷い込んだんだらう……。

気が付いたときには、お気に入りのピンクのドレス。ピーターラビットのような可愛いウサギの絵柄とアルファベットで「メイ」が白くパターンになつて入つているものだつた。これは普段は子供服はデザインしない母親がお誕生日にあわせて珍しくデザインして特別に作つてくれた物だつた。つまり、パジャマを着てなかつたので、おそらく家に帰る前だつたのではないかと思うけど、それはいまいちはつきりしない。

小人たちが私のことを誘拐したなんて思えない。小人們たちは私のことを初め警戒してゐみたいな雰囲気もあつたけど、ゼノンさんにとってもテーケさんにとっても、本当に親切にしてくれてる。むしろゼノンさんが芽衣がどうからやつてきたんだ?みたいな感じだよね。

まさか、これ全部夢の中のお話つてことはないよね?

だつて、芽衣の体はやつぱり傷ついていて、痛みがあるし。

考えたくないけど、眠つてゐる間に交通事故にでもあつて、芽衣一人だけ車から衝撃で放り出されたのかな?

それなら体中のこの怪我や痛みの理由も説明できるけど……。

それならパパとママはもしかしたら大怪我をしてるかも!。

ううん、きっと大丈夫なはず。私は何でか一人ぼっちだけど、それでもこうやって不思議な小人たちに助けてもらつたもん。パパやママだつてきっと大丈夫なはずだよ。

今こいつやつてぐずぐず悩んでも仕方ない。どうやつたって、両親のことを知ることはすぐにはできそうもないのだから。早くパパとママを探したいのに……。

「まだにうまく聞きたいことが聞けず、すげく歯がゆい。

それにしても、もし想像してみるみたいに自分が車から放り出されたんだとして、うちの近所には小人達が住んでる森なんてないよね? というか、それなら、ここはどこなの?

大人びた考え方ができるといつても、芽衣はまだ6歳になつたばかりで、彼女の常識の中に「小人達が住む森など地球上に確認されている場所はない」、などというものはなかつた。

どちらかといふとお話が好きで夢見がちな芽衣にしてみれば御伽噺に出てくる小人さん達は日本には住んでなくても外国ならいるのかもしれないというくらいにしか考えていなかつた。

「どうやって外国に来ちゃつたんだろ?」

芽衣が初めて地球じゃない場所に自分がいるのだと気付いたのはそれから数日たつた月の明るい夜にふと窓から外を見上げて大きな丸い月が一つ見えたときだつた。

いくら夢見がちな芽衣でも地球にはお月様はたつた一つしかないのは知つていた。そして眠れない夜にパパと一緒に見上げたお月様にはウサギさんがお餅つきをしていたはず。

「これからはどちらの月にもウサギさんは見えなかつた。

「外国どひか、違う世界に来ちゃつたんだ……。」

芽衣は体が充分に良くなつたら、小人さんたちに手伝つてもらつて、なんとか日本のお家に帰ろうと思っていたのに、それが思つて

いたよりもおそらくずつと大変だなー」と初めて気が付いた。
どうしたらしいんだろう。

思わず見上げた夜空には地球から見える月とは違つ一つの月が輝いていた。

お月様は世界が違つてもやつぱりきれいで、芽衣を優しく励ましてくれているような気がした。

ふと胸元が光つたようなきがして見るとペンダントの青い珠が月の明かりに反射してきれいに輝いていた。

なんだかこの青い珠、地球みたい。

お月様は自分では光らないけど、太陽の光が反射して輝いてるんだよ、といつていたパパの声が聞こえた気がした。

パパは子供の頃は宇宙飛行士になりたかったらしくて宇宙の話が大好きだった。パパも生まれるより前に地球から月に行つた宇宙飛行士は月に降り立つて地球を振り返つて地球から月を見るように太陽で反射して輝く青い美しい地球を見たんだよね。パパがうれしそうに宇宙の話をするのを聞くのが大好きだった。パパ、私が地球とは違う惑星（？）から一つのお月様を見上げたなんて話したらきっとすつごく羨ましがるだろうな！

芽衣は少しだけ父親を思い出して涙が出てきたけど、ほんの少し元気が出てきたようだ。

小人さんたちは芽衣の世界のことを知つてゐるかしら？でも、それを聞くにはまだまだ言葉をうまく話せるようにならないと…。小人さんたちが何を言つてゐるのか、まだよくわからないから。もつと言葉を勉強して、何とか帰る為に必要な情報を集めないと。

芽衣は寂しいことには慣れていた。だからなんとかその寂しさに蓋をすると平気なふりをした。

ちょうどそのときテーノが夕飯ができたのでテーブルに着くよう
にいつたので、元気に返事をすると、テーノの元に出来上がった食
事を並べるために向かつた。

芽衣はここでの食事が大好きだった。テーオが料理上手なのもあるが、ゼノンとテーオと三人で囲む夕飯は、あの誕生日に両親と食事をした楽しさを思い出させてくれる。

みんなで食べると、ご飯はいつもより、もうとおいしい。

『テーーー、これ、いっぱいの、おいしい。』

第四話 テーノ

『テーノ、お手伝い、すーる』

メイは一生懸命覚えた単語を使って話しかけて来た。

『やうかい？うれしいね。それじゃ、私が洗つたぶんを拭いていつてくれるかい？』

テーノはあつという間に言葉を覚えていくこの人間の子供に随分と感心していたが、そのことには触れず、手伝ってくれるというその気持ちがうれしくて微笑んだ。

テーノとゼノンには3人の頑健な息子達がいたが、どの子ももう家を出てそれぞれ長男は鉱山で、次男は森で、そして一番下の息子も今はまだ見習いだが細工師として立派に働いていたし、家にいた頃にしても腕自慢のけんかばかりで母親を手伝うなどめつたにしなかつた。

可愛い我が子達にはかわりなかつたが、こつして手伝ってくれるメイがまた違つて可愛らしく、なんだか娘ができたみたいでうれしかつた。

メイはゼノンによるとおそらく生まれてからそれほど経つていないらしく、独り立ちにはまだまだ遠い年齢のようだ。人間は独り立ちするほどの年齢に達するまでの成長はドワーフ族よりもゆっくりと聞いているので、おそらく年齢的にはまだ幼児といえる5・6才程度なのだろう。それにしてもそんな小さなうちに親元を離れることはひとり立ちの早いドワーフ族でもないことなので、おやじく親とはぐれてしまったのだろうこの子が不憫だった。

そうは言つても、背の高さはテーノと大してかわりなく、小さな子供だというのがなんだか不思議な感じがした。

確かに、顔立ちも時々トレー・デイングに来る人間族の男達と比べて愛らしく幼いのだが、身近に見ることのほとんどない大型の種族の子供というのは頭でわかつても初めはやはり不思議な感じがした。

いまはテーノの服を少しつめて着せているが、初めに着ていた服もドwarf族とはまったく違つたものだつた。

ドwarf族の一般的な着物は獸の皮を加工したものが主で、ほかには毛の長い獸から取れた毛糸を粗く織り込んだ物のみだ。

最近はトレーディングでやつてくる人間族の作る植物から取れた纖維の衣も出回つてはいるがさすがに高価でテーノはまだ一枚も持つていなかつた。いや、特にほしかつたわけではないが。

一体どの植物からとつた纖維を織つたのかよくわからない薄い布はその織りは見たこともないほど見事に細かく一定に整つており、はじめてみる鮮やかな薄い紅色に染まつた布に不思議な文字と動物らしい絵柄が描かれており、おそらく一流の技術を使ったものではないかとテーノは思つていた。

いつも来る人間族の商人どもが持つてきた布よりも更に素晴らしい織りのそれはそれならばいつたいいくらくらいするのだろう? 布だけではない。縫製にしても、一定の間隔で細かく細い糸で縫われたそれもまた恐ろしく均一で今までに見たことがないものだつた。

首もとを飾る、ドwarf族である自分にしてみたこともない不思議な青い珠の首飾りも小さな子供が持つには不釣合いなほどほとん

ど完全な球体をしており、またその珠をつなぐ細かな鎖の技術も驚くほど高く、精巧でこれは田玉が出るほど高価であることが予想される。

不思議な動物の形の使い古されてはいるが柔らかな大きなぬいぐるみは、ドwarfにはぬいぐるみや人形を持つ習慣はないので良くわからないが、これもまた毛皮ではない特殊な材料を使った柔らかな素材が、子供の持ち物として普通では考えられない。

そうだとすると、この人間の子供は驚くほど裕福な家庭の子供なのだろうか？

考えても人間のことなどほとんど知らないTeeにはわからなかつたが、実際そのようなことはどうでも良かった。

ドwarf族は鉱山から採れるさまざまな輝石や、魔物から取れる魔石を加工する技術に長けており、また、トレーディングによりかなりの金額の黒字をいつもはじき出している。

それだけでなく、衣食住どれも自分達ですべてまかなうことができる彼らは金銭に対する感覚が人間族たちと比べてかなりあいまいだった。

基本的に、実直で仕事熱心、派手なことが嫌いな彼らはどの種族と比べても一番お金をためてているのかもしれない。

反対に南に住む同じような小柄な種族elfもはいつも歌つて踊つてばかりの派手好きな浪費家だった。

Teeはelfのことを思い出してうんざりしたように首を振つた。

まあ、そんなことはどうでもいいわ。

この小さな女の子の洋服はあまりに高価で、あまり人目に付かせるのもまずいだろう。

首飾りもできるだけ隠しておいた方がいいね。

ぬいぐるみは……、まあしょうがないかねえ。

あの子が手放すとは思えないしね。

私が何とかしてやらなきやね。

テーノはまず手始めに先日手にはいった皮を使って作る洋服のデザインを可愛らしい女の子用に作ることに決めた。

第五話 驚きの白い本

テーノの手伝いとして朝食の後片付けを手伝つた後、今や口課となつた語学学習のためにゼノンの部屋に向かつた。ゼノンの部屋は壁全体がほぼ本棚で埋まつておりそこには大切そうに革表紙の本が沢山並んでいた。

いつものようにゆつたりとゆりいすに座つて、パイプをふかしながら最近トレーダーから仕入れたまだ真新しい本を読んでいたゼノンは羊皮紙をめくる手を止め、芽衣に向かつて微笑んだ。

『メイ、今日は少しいままでと違つことをしようか』

ゼノンが芽衣を見ていたずらっぽく笑つた。

『ゼノン、違つこと、何、ですか?』

芽衣は一生懸命質問する。

『今日からこれを使うのだよ』

ゼノンが芽衣に手渡したのは黒く染められた板つまり黒板と白墨だつた。

芽衣はゼノンが予想していたように黒板とチョークに驚くことはなく、当然のように用途がわかっているようだつた。白墨は石灰岩が豊富にとれる山からドワーフ族が開発した輸出品で、それほど各地に広まっているものとは思えないのだがメイはすでに知つているとは。

『文字教えてくれるですか?』

ゼノンはうれしそうに聞いてくるメイを見て、（村のほかの子供達ならはだしで逃げ出すようなことなのに。）純粹に喜んだ。

『さすがだね、メイ。これが文字を書く練習のものだと良くわかったね』

ゼノンの言葉に芽衣は少し困惑したような顔をした後、思つたままを答えた。

『ハイ。私、それ同じあつた、見た。文字教えるといい。先生この板使う、壁大きいこの板あつた。この白同じ。書く使う。子供、書く、白い本』

ゼノンはもう芽衣の片言にもだいぶ慣れていたので、彼女が言いたいことは大体わかつたが、最後の子供が白い本に書くというところがいまいち良くわからなかつた。

『メイ、白い本というのはなんかい？本は普通は文字がすでに書かれているから白くはないだろ？それに、先生が黒板を使って、子供達は、本に書くのかい？もう一度説明してくれるかな？』

ゼノンにとつては貴重で高価な本に練習のために文字を書き込むなど言語道断だつた。しかし芽衣にしてみれば普通にあふれかえていた安いもので数十円から買えるノートがこの世界では常識ではないことがまだ良くわかつていなかつた。

なので、テディのおなかから取り出したノートを実際に見せて説明しようとしたときこれほど驚かれるとは思わず芽衣の方が動搖してしまつた。

『「これは……』』

『白い本。『ノート』』

芽衣はとりあえず、これのことを語っていたのだと説明するため
にそのノートに持っていたペンで日本語でメイと書いた。

『なんでもつたいない！』

ゼノンはそれによけい驚いてまるで芽衣が悪いことをしてゐた
に見た。

『メイ、書く。『れ、白い本、買う、いっぱい。書く、大丈夫』

なんとか伝わっただらうか？でも、いっぱい買うといつてもいま
はどうやら簡単には買えそうもない』ことがゼノンの反応でわかつて
がつかりした。

『メイ、ちょっとその本を「ノート」だったかな？私に見せてく
れるかい？』

ゼノンが興奮を抑えたように聞くので芽衣は素直に渡した。

なんということだ！

この白い本はメイがいつとおりまさしく白く、一枚一枚が均一の
大きさで驚くほど薄く、その上きれいな平らだった。

表紙は鮮やかな空の色をしており、なにやら文字らしきものが書

かれているが、いったいどのよつなインクを使ったのか、これも良くわからない。

中の白いページも、薄い青色で均一な線が何本も走っており、初めの方のページにはメイの文字でその線に沿うよう何かが書かれている。どのページも、メイのものと思われる字以外には、何も書かれていない。

どう見ても自分が普段見慣れている本、そう、羊皮紙を使ってつづった本とはまったく素材からして違う。

これは何の動物の皮なのだ？

それとも、もしやこれは皮でさえないのでしれない。

こんなものは今まで見たことがない。

人間族の町にはこんなものが普通に出回っているのか？本当に？何かが違うといつている。

テーノが言つていて初めて気付いたが、彼女が初めに着ていた服も、そしていつも肌身離さずつけているペンダント、そして、「ティ」もどれも技術的にかなり進んだものようだ。

それにしてこの紙はいつたい何でできているのか？

表紙部分の明るい色も、私の知つているどの染料でも出せない色だ。

なにかが引っかかるがどうしてもわからない。

『メイ、これはどうやって手に入れたんだい？』

メイに聞いてみると、彼女には意味が本質的にわかつていよいようだったので、自分が持っている本を一冊メイに手渡して中の紙を見てみるよう指示した。

『これ、紙、違うです。皮？』

疑問系で聞く彼女の驚きの様子を見て初めて羊皮紙の方こそ彼女

には珍しこじがはじめてわかつた。

『紙、つくる、木、草。メイ、わかる、少しだけ』

メイがまた驚くことを言つてゐる。彼女の言つたことを信じるビビ
うやら、木や草から紙を作れるらしい。

だが、いつたいビビやつて？

言われてノートをもう一度開いてようく近くで見てみると細かい
紋様のようなものが見える。少しそれが気になり、窓から入る太陽
の光にかざすと纖維が折り重なつているように確かに見える。
植物の纖維でこれを作ったのか？だがこの白さはいつたいビビや
つて？それにこのように纖維を細かくする技術、くつつけて薄くす
る技術。今までまったく聞いたこともない技術だ。

その紙の作り方には興味があるが、今日は彼女に文字を教えるこ
とが大事だ。

メイがもつと流暢に言葉が話せるようにできるだけのことをして
あげたい。

おいおい、紙のこととはメイにわかる範囲で聞いていいわ。

『メイ、悪かったね。それじゃ初めの予定通り、早速文字を練習
しちやうね。まずはすべての文字を書いたものを見せるからそれをお
手本に、黒板に練習をしなさい』

芽衣は、ゼノンが初めの予定を思い出してほつとした。
ゼノンの言つとおりに、しつかりとお手本を見ながら文字を書いて
いく。

時折ゼノンが、手を添えて正しい書き方を教えてくれた。

芽衣は丁寧に一文字一文字丁寧に覚えながら書いていきながら、先ほどの紙についてのやり取りについて考えていた。

ゼノンの様子からして、この世界には自分が良く知る紙は存在しないみたいだ。もしかしたらあるのかもしれないけど、ゼノンはカルチャーショックを受けていたみたいなので、見たことはないんだろう。

そして、ゼノンが持っている本は、今までまったく氣にしていかつたけど、どうやら昔のヨーロッパの国にあった羊皮紙という動物の皮で作った紙に似ている。

以前、パパとママと一緒に行った博物館でガラス越しに見たことがあつたけれど、あの黄ばんだ色といい、見た目がよく似ている。きっと羊皮紙だ。

よくわからないが、どうやら本はすごく高いものらしいこともノートに名前を書き込んだときのゼノンの様子でわかった。

ノートはこれからあまり使わないようにしないといけないかも。

それにしても、本がそれほど貴重品ならば、芽衣がほしいと思っている自分の世界に帰るための方法が書かれた本を探すのは凄く難しいかもしだれない。

ゼノンの部屋には沢山の本があつたので、本自体は普通にそちらで手に入るものだと当然思っていたが、そうではないのかもしれない。

そのことに少しがりくらしたが、まだそうと決まったわけではないので、今はできることをやれるだけやるうと必死で文字を書き続けた。

時々、休憩のためにティーが焼いてくれたクッキーを食べたりしながら夕食前までにはすべての文字を見ないでもかけるよになっていた。

『大変よくできました。メイ、随分上手に書けるようになつたね。それではその黒板と白墨はメイに上げるからじぶんでも、手の空いたときなんかに練習をするんだよ』

ゼノンの言葉にメイはしつかりとうなずいた。頑張ろう。文字が読めるようにならないと本を読むことなど出来ないのだし。

森に住むドワーフたちは洞窟の採掘場で働く若い元気なドワーフたちのために毎日食事を届けることが仕事だった。女達は年をとつたり怪我をして洞窟で働くのが難しい男達と昼間森の中を回り、たくさんの食料を手に入れてそれを料理し温かい料理を届けるのだった。

メイは毎日、語学の勉強をしていたが、体が良くなつてからはテー
ーーと一緒に森の中に食材を調達に出かけるのが日課になつていた。
都會育ちのメイにはその森は宝物の山のように思えた。
きらきら光る赤い実や、可愛らしいピンクのお花畠。飛び交う鳥達
は美しくさえずり、泉の水は飲んだら頭がキーンとなるくらい冷た
くて美味しい。

「メイ、その赤い実は美味しいぞうに見えるけど、口に入れるんじゃないよ。そのままでは渋すぎるからね」

メイが綺麗な赤い実をもいで食べても大丈夫かとテーケに聞くと
テーケがあわててだめだといつた。

「テー人、それならどうしてこの実を摘むの？」

メイが小首を傾げてテーケを見上げる。

「これはね、天日で乾燥させると甘くて美味しい保存食になるんだよ。栄養価も高いし、よく覚えておくと良いよ」

テー^ノはそ^うい^いな^がら小^さな籠^{くら}に^いつぱ^いに^なる程度^にそ^の実^{じつ}

を摘んだ。

森のことなら何でも良く知っているテーノが丁寧にどれが食べれるものかを教えてくれるのが とっても嬉しい。

好奇心旺盛な年頃のメイが何を聞いても嫌な顔ひとつせず、一つ一つ説明してくれるテーノもまたメイにとつて素晴らしい教師だった。

日本にいた頃はパパもママもとつても忙しくて休日も一緒にゆっくり過ごすことがあまりなかつたので、今のようにゼノンやテーノがいつも構ってくれるのが素直に嬉しかつた。

初めは見たこともない植物ばかりでどの植物もなかなか違いがわからなかつたが、テーノを手伝つついにコツがつかめてきたようにな細かい違いもわかるようになつて來た。

「そろそろボッカ芋が食べごろの大きさに育つてきてるね。夜はまだ少し冷えるし、今晚はあつたかい山鳥とボッカのシチューを作ろうかね」

そのシチューはなんとなくクリームシチューのよつな味がして、メイのお気に入りの料理の一つだつた。

「うん！ テーノ、私にも手伝わせてね」

鳶色の皿をきらきらさせて嬉しそうにそうこうメイにテーノは嬉しそうに微笑んだ。

森での食料の採集も体力はいるけどとても楽しい。

テーノの作る料理がとつても美味しいのでそれが毎日楽しく楽しめた。

重たいものを運ぶのも、遠くまで歩くのも大分慣れてきたけど、日本ではまだ小さいからとそんなことやつたこともなかつた。ここでは小さな子も当然のように重い荷物を持つこともお手伝いの一つだし、頑健なドワーフの感覚ではこれ位は軽いものだというのもあ

つたのだけれど。メイにとつてはやつぱり凄く大変でお家に帰る頃にはくたくたになつてしまつ。

でもその疲れも吹つ飛びくらいテーの料理は暖かくて美味しい栄養もいっぱいだ。

メイは今日の夕食を楽しみにしながらジャガイモとサトイモの中間のようなその芋を丁寧に掘り棒で掘り起こして背中の籠に積んでいった。

すでに朝方仕掛けておいた鳥用のわなにかかつていた山鳥を三羽もすでに回収済みなので、テーもまたご機嫌だつた。鉱夫たちに持つていく分も十分に出来るだろう。

森には美味しい木の実や、果物もたくさんなつていたし、煮込み料理に使える根菜類などの野菜なども豊富だつた。そのためかドワーフたちは狩猟採集民族のようで畠や家畜などはいないようだつた。確かにわざわざ森を拓いて畠を作るより、そこにある豊かな恵みをあるがままに受け止め、旬の食材を使って料理することは理になつてゐるようと思われた。

スーパーで季節に関係なく食べたいものを好きなだけ買つてくることができる日本とはまったく違つが、幼いメイにしてみれば主婦であつたわけでもないのでそれほど違和感を感じないままテーについて学ぶ自然との共生のあり方がすんなりと身についていった。

ある程度の年齢になつていたら、メイにしてもここまで生活に慣れるのに簡単にはいかなかつたかも知れない。

テーは小さな手を良く動かしながら果物を採つてゐるメイを見下ろしながらふつと微笑んだ。

初めて森に食材を集めるために連れて來たときあまりにもメイが非力でびっくりしたものだ。あれからもう3回一の月が満ち欠けを繰り返した今、メイはおそらく同年齢の子供（メイの方が背は随分高いのだけど）程度には重いものも運べる程度にお手伝いができる

るよつになつた。

何より頭が驚くほど良くて、大抵のことは聞き返さずにもう覚えてしまつていた。

食べ物のことも驚くほど良く覚えていて毒になるきのこももつちやんと見分けがついている。

ただ、好奇心が旺盛過ぎるのが玉に瑕でうつかりとして危ない場所に踏み込みそうになることが多々あるのが危なつかしくて目が離せない。

一度大型の獣の巣の近くまで行つてゐるのを見つけたときは本当に肝が冷えて初めてお説教をしたものだつた。

こんなメイが元の世界ではおとなしくて家にいつもいてばかりの子供だったとはテーノはちつとも気づかなかつた。

とはいへ、それからはメイもできるだけ危ない行つてはいけない場所や、してはいけないこともよく覚えて聞き分けよくしてゐる。

その上最近はお料理も覚えたいようで、テーノが作つてゐるところをよく見でいるのでテーノが知つていろいろな料理を教えてあげてゐる。

メイは料理が好きだ。

テーノが丁寧に教えてくれるドワーフ族の食事はとつても美味しいでも覚えたが、日本で食べていたものがやっぱり食べたいなあ。

日本にいた頃はお手伝いさんと一緒にお料理を良くしていただが、残念ながらその頃に学んだ 料理を作るには食材も、調味料も整つていい。

お醤油もお味噌もやっぱり手に入りそうもないよなあ。

メイは少し残念だつたけど、持ち前の柔軟な発想で鳥の卵と酢の代わりにレモンに似たすっぱい柑橘類の絞り汁と植物から抽出した

油とを混ぜてマヨネーズが何度もかの失敗の後分量がうまくいった
ようで成功したときは大喜びしてテー^ノに味見してもらつた。

「ん? なんだか珍しい味だねえ。」

そういうテー^ノに、生で食べられる野菜をいくつか刻んでサラダを作つてそれにかけて食べてもらつた。

「うん。食べたことのない味だけどとっても美味しいよ。」

テー^ノに褒めてもらい、その晩の食卓の一品にサラダをつけることになつてメイは凄くうれしかつた。

この世界には小麦粉も塩もあるし。よし、明日はうどんの麺に挑

戦だ!

第七話 パパとママに会いたい（前書き）

随分と更新の間が開いてしまってすみません。

第七話 パパとママに会いたい

メイは言葉が何とか通じだした頃から今迄何度も両親のこと若しくは、あちらの世界のことを知らないかを聞こうと随分と努力してきた。今まで学んだ自分が知ってる限りの言葉と身振りも使ってゼノンたちに一生懸命聞いてみたが、二人ともまつたくしらないらしいことがわかつただけだった。

「お前を見つけたとき、お前はたった一人で森の入り口近くで倒れておつたよ。周りにはお前の両親らしき人たちどころか、乗り物も、手がかりになりそうな物も、足跡さえも何も残つていなかつたよ」

ゼノンがメイの目を見ながら答えた。これでもうすでに何度もになる説明に肩を落とす様子にゼノンも心を痛めていた。テーノもまた心配そうにメイを見ている。

約三ヶ月ほど経ち、以前は言われている言葉もよくわからずでいただけだったが、メイは驚くほど流暢に中原の共通語を操れるようになつていた。今ではドワーフ独自の言葉でさえ随分流暢になつている。

しかしその言語能力をもつてしてもゼノンたちが知らないものまでは聞きだせるものではない。

パパもママも向こうの世界にいるままなのかな？

メイだけがこちらに来たのだとして、どうやってこの世界に渡つて来たのだろう。

不思議なことが起つたのは間違いないが、いつたいどういう状況でこの世界にくることになつたのか、いまだにわからない。

両親が共に元氣でいるのかさえ手がかりもないのでわからないの

は辛い。

メイがまたいつものように落ち込んでしまったので、ゼノンは何かメイに元気を出してもらおうと考えた。

「お前は随分と傷ついていたし、私としてもそれほど念入りに周りを調べて見たわけではないのだよ。お前も最近はテーノと共に森歩きにも慣れてきたようだし、もしお前がそこまでして知りたいのなら、明日にでももう一度お前を見つけた場所に連れて行ってあげようかね。少し森の奥のほうにあるのでそうだね、半日は歩かないといけないがね。まあ、運がよければ何か思い出せるかも知れないね」

ゼノンが励ますようにそいつてくれたけど、メイが見つかってからもう随分、三ヶ月はたっているので、何がが見つかるとは思えなかつた。だけど、優しいゼノンの気持ちも嬉しかつたし万が一の為にそこに行くことにした。

「メイ、そうだ。お前が前に話してくれたお前の国の話をもう少し聞かせてくれるかい？」

テーノがにっこりと微笑みかけてくれた。
気分を変えようと話題を教えてくれたようだ。

ゼノンにしてもそのことはとても興味があつたので異存はない。

「私が住んでたのは青い『地球』といつ……『惑星つてなんていつたらしいのかな……？』うーん、場所で、そこの『日本』という海に囲まれた島国が首都に住んでいたの。日本はとっても物が豊かで、でも人がとっても多くていつもみんな忙しい忙しいって言つてた。ドワーフ族とは違つて、森の中には住んでないの。あまり周り

にここみたいに木はなかつたわ

メイは何とかゼノンにわかりやすいように答えようと一生懸命日本語交じりながら考えて答えた。いくつかの言葉はゼノンたちが普段使わない類だったり、固有名詞だったりしたので日本語を交えなければいけなかつたのだ。

ゼノンはいろいろ聞きたいこともあつたが、ここはとりあえず黙つてメイの思うように話させることにした。テーノも口を挟んで質問をしたそuddたが、ゼノンに田配せされておとなしく聞くことにした。

「わたしのパパはたくさんの人があつたが、ここはとりあえず黙つてメイの思うように話させることにした。テーノも口を挟んで質問をしたそuddたが、ゼノンに田配せされておとなしく聞くことにした。

メイは口数的にもう小学校の入学式はとおの昔に終わってしまった頃だらうとわかつていたので言い直した。ゼノンもテーノもメイがさびしそうに最後を言い直したのを聞いて不憫に思つたが、メイは氣を取り直したようにそのまま続けた。

「夜にお空に見えるお月様は黄色くてひとつしかないの。あと、人間のほかには動物がすんでるくらいでドワーフ族は見たことなかつたわ。もしかしたら遠くに住んでるのかもしけないけど……、わたしは本でしか読んだことないの。背の低い人たちのお話

ゼノンがメイの話を聞きながらじっと考え込む。

「月がひとつしかない世界……。うん。なかなか信じがたかつたが、やはりメイ、お前はこことは違う世界からやってきたということになるようだね。私達はね、はじめは、お前はこの世界の人間族の娘だと思っていたんだよ」

ゼノンがそういうとメイはびっくりした。

ゼノンたちに言葉を教えてもらうなか、この世界のことについても随分教えてもらっていたので、人間族という、大柄な種族が住んでいることは知っていた。しかし違う世界にいることがわかつてから一度も周りで人間を見たことがなかつたこともあり、メイはもしかしたらこの世界の人間族は自分達とは見かけも何も違うかもしれないと思っていたのだ。

「この世界の人間族はわたしと似た外見なの？」

ゼノンはうなずいた。

「そうだよ。見た目は良く似ているね。われわれドワーフ族とはちがい、力はあまりないが、背は成人の男性で、一般的にドワーフ族より頭3つ分くらい高いのではないかな。耳の形もわれらと違い、お前とよく似た丸い小さなものをもつてているね。私はトレーディングでくる商人の者達にしかあつたことはないがね」

メイは自分とよく似ているという人間族の商人の話を聞いてみてみたいと思つた。

「人間はよく来るの？」

ここに来てから大体3ヶ月は経つ。次にくるのはいつなのだろう？

「そうだね、いつもは夏になる少し前くらいに来るから後、一の月が満ち欠けを後もう一つ繰返した頃じゃないかな」

メイは、一の月といつのが一つある月の少し赤みがかつた大きな方のものであることを思い出しても、今までの三ヶ月ほど滞在でどのくらい月が満ち欠けしたか考えてみた。

初めて二つの月を見つけたのは日覚めて3日目だった。その時赤のお月様はほぼ満月に近かつた。その2日後に来た満月の日から14日で一度お月様はかけていつた後、まだだんだん大きくなつて、また14日で満月になつたわ。

といふことは一度月が満ち欠けするのが28日。地球とほぼ同じ周期でお月様が満ち欠けすることになる。それを一ヶ月だと数えて……。

おととこ一の月は満月だつたから。

「それなら、あと、26日後の一の月が満月の日へりこへるのかな」

メイがつぶやくひみつ言ひたのを聞いてゼノンは驚いた。

「お前はこつたとい今どいやつての日数を割り出したんだい？」

ゼノンが驚いているのを不思議に思いつつメイはびやついたのかこたえた。

「お前、まさか計算もできるのかい？」

メイはゼノンがおもわず興奮したように聞いてきたので少しまたように体をすくませた。

「別にできることが悪いと言っているわけではないのだよ。ただお前のような小さな子が月をきちんと観測して、そこから日数を割り出すなんてできることに驚いたのだよ。」

ゼノンは内心、舌を巻くほど驚いていたがどうしたことか怯えているメイを安心させるためゆっくりと田を見て答えてあげた。

メイもゼノンの田をじっと見つめ返した後、ほおつと息を吐いた。

「私、他の子とちょっと違うからお友達がいなかつたの……」

メイは競争が厳しい有名な私立幼稚園に通っていたけれどそこでも異例なほど飛びぬけて頭の回転が良かつたので、年の近い子とはあまり馴染めなかつたどころか、仲間はずれにされていた。とくに小学校の受験はトップクラスの成績で有名私立に合格していたので、そのこともやっかみの対象だつた。

普段からあまりみんなと違うことをするとこじめられるのでいつも一人ぼつんと隅で遊んでいたことを思い出したのだ。

ゼノンはメイの話を聞いてひとつうなずいた。なるほど。この子はあちらの人間族の中でもやはり特に嫉妬をされるほど頭のいい子なのだろう。言葉を覚えるスピードにも驚いたが、月の満ち欠けを冷静に観察していたことも、読み書きに計算までできるとなると本当にわれらドワーフの子供とはまったく違うな。うーん、これは鍛え甲斐のある生徒ができたものだ。

「つむ。嫌なことを思い出させてしまつて悪かつたね。私はお前が計算もできてとても賢い子だと再確認していただけだつたのだよ。そう、話を戻すがトレーダーが来るのがおそらくお前が言つたようになつた後だつうと思つ。お前、人間族に会いたいのだろう?」

メイはそれを聞いてこくりとうなづいた。

「会って、どうしたいのかな？」

ゼノンはメイがなんと答えるのか興味があった。

テーノは何か怯えたような表情をしてじっとメイの答えを待った。

「帰れる方法がないかさがしたいの。人間族に他の世界から来た人が他にいないか聞きたいの。沢山人がいるところか、沢山本があるところなら何か分かるかもしけないから。パパとママのいるお家に帰りたいの」

うつむくメイの目から涙がひとつこぼれた。

第八話 巨木と風の癒し

昨夜は両親をして故郷を想つて泣き出したメイを泣きつかれて眠つてしまつまでテーノが抱きしめてなだめてあげていた。

今までほとんど泣き言も言わず、一生懸命言葉を学んでいたメイを見ていたので、あの子がまだほんの小さな娘だといつ」とをビビりで忘れてしまつていたようだ。

まだまだ両親に甘えたいといつ気持ちがあつてもおかしくはないだろう。

人間族と比べてどれほど違うのかは分からんが、一般的に早く親元を離れるわれらドワーフ族の子供達でさえ、少なくとも10回季節が巡つてくるまでは親元を離れない。

メイは本来親元で大切に育てられていくべき年齢だひつ。
そう考えればこの子が家を恋しく思つてゐる気持ちも当然であるのに。

何を教えても楽しそうにあつという間に吸収して、その先を質問していくようなメイにいつの間にか、必要以上の愛情を感じてしまつて入るのもしれない。あまりにいつも楽しそうにしていたので、本当はここにずっとといたいのではないかと期待をしてしまつていたのだろうか。どうやらこの子をうちで預かつてゐるのかといつ本来の目的をいつのまにかに忘れていたようだ。いや、私自身がこのこと共にあることが楽しくて、いつまでもこの暖かい関係を続けたいと心の中で望んでいたからだろうか……。この子が自分の両親の元に帰る為に必死に言葉を覚えていたことを、なんとか家に帰るための手がかりを探したいといつも思つてゐるだろうこともちゃんとわかつてゐるつもりだつたのに……。

ゼノンは朝食を3人で囲んで食べながらソットメイの様子を伺つた。

今日は新しくテーノが仕立てて上げた可愛らしい女の子用のドワーフの衣装を身にまとい、テーノと嬉しそうに話していく。森歩き用のフードつきのケープ、動きやすいズボンに可愛らしいチュニックも珍しくビーズを使って装飾を施した随分気合がはいったものだつた。可愛らしいブーツも森歩きに適したものをつけた。

昨日ないでいた名残か目が少しほれではいるようだがそれ以外には特に問題はなさそうだ。

そうは言つてもまだ少しつもより元気がないようだが食事はきちんと食べている。

「メイ、とつても似合つているね。そつやつて、ドワーフの衣装を着ていると私たちにかわいいドワーフの娘ができたようだよ。」

ゼノンは半分以上本気でそういうてメイに微笑んだ。

「わあ、食事が終わつたら昨日はなしていただけたお前を見つけて場所に連れて行つてあげようね。でも昨日言つたようにあまり期待はしない方が良いだ。」

少しためらつた後ゼノンはメイにそう言つた。

メイは可愛らしく微笑み、ありがとつとゼノンに言つた。

朝のさわやかな日差しが木々の間からこぼれ美しい光のリボンをあちらこちらにばら撒いている。メイはゼノンとともにいつも食糧

を調達する場所より更に離れた場所に来ていた。

メイが森の中を嬉しそうに見て回っているのをゼノンは少し安心して見つめていた。

よかつた。昨日は随分と泣かせてしまったから心配だったが、今日はもうこのように元気に周りを見回る余裕もあるようだ。この子は精神的なものも随分と強いようだな。

「そろそろ見えてくるが、今から行くのは、エルフ族の住む村と比較的近い泉からさほど離れていない大木のあたりだ。普段私はそのあたりまで出ることはありませんのだが、その日はその泉のほとりにのみ生える薬草を冬場に備えてとりに行つた帰りだった。少し疲れたので休憩しようとその大木の根元に腰掛けようとしたところ、お前を見つけたのだよ。ほら、これがその泉そして、見えるかい？あの大木の根元付近の茂みの中でお前が傷ついて倒れていた。」

メイは美しく澄んだ水を湛えた泉を見て感嘆のため息をついた後、ゼノンの指差す方を見てその巨大な森の主のようにたたずむ木の偉容をみて息を呑んだ。

「大きいね！」

メイの反応に柔らかに微笑んでゼノンは話を続けた。

「そう、お前はその大きな木の根元から大体このくらい離れたそうだな…、このあたりにあちらを頭にたくさんの葉っぱに埋もれるように倒れていたのだ。私は最初、近くに住むエルフ族がまた飲んで酔つ払つて倒れているのかと思い、始めはそのまま通り過ぎようと思ったのだが、お前の変わった服装とその傷に気付いて近づいたのだ。近づいて見ると人間族の少女だ。お前はティディを抱きかかえ

ており、私が離そうとしても必死で抱きしめていたので大事なものだと思いそのままにしておいた。周りを見回してみても乗り物の痕跡はあるか、おまえ自身の足跡さえ残っていない。ただ、お前が倒れていたあたりに大木の葉が随分と落ちていたこともあるし、随分上のほうから枝が折れているのも見た。まるでお前を誰かが空の上から放り投げでもしたかのようだつた。私は驚いてお前の傷を検めたよ。どうやらたくさん敷かれていた葉っぱが更に緩衝材の役目を果たしたのか、幸い、大した出血もなく骨折もしていないようだつたが、まだ春先の朝晩は冷え込む森に気を失っている小さなお前をそのままにしておけず、負ふつて連れ帰つてきたのだよ。お前はいつたこどうやってここにやつってきたんだろうね？まさか本当に空の上から？」

ゼノンが淡々と語るのを聞いていて、メイも疑問に思つた。

何で覚えてないのかな？私本当に寝てる間にここに来たのかな？

パジャマを着てなかつたからきっと家にはまだ着いてなかつたはず。それなら車の中で眠つてしまつてた間にここに来たことになるのだが。

なんで私だけここにいるの？パパもママも一緒にいたはずなのに…。

メイは昨日の夜、おそらく異世界から迷い込んでただらうことをはじめてゼノンとテークに話した。そのときに、ゼノンならもしかしてそういう話をきいたこともあるかもしれないと思のため聞いてみた。しかし残念ながらゼノンは知らないということだった。

ドワーフの賢者であるゼノンでさえ知らないならやはり他の種族に聞いてみるしかない。特にゼノンが以前話してくれた中原にある

人間の住む大都市の図書館なら何かの記録があるかもということに期待するしかない。中原まではなんと魔物も沢山出る場所をとおつてすごく大変な旅をしないとたどり着けないし、とってもとつても遠いと聞いている。行くのは命がけだし、もう2人にも一度と会えないかもしねない。

あ、ゼノンすゞく心配そうな顔してゐる。昨日いっぱいなにちゃつたからなあ。

また情けない顔をしてるからきっと心配してゐるのだろうと思い、メイが無理に微笑もうとするゼノンがぽんとその小さな体格と反比例して大きな暖かい手を頭に載せてくしゃくしゃとメイの髪の毛をかき混ぜた。

あつたかい手だな。

何か懐かしい思いがして思わずメイは涙がまたこぼれそうになつた。

「メイ、お前がどこからどうやって来たのかは私達にも分からんが、ごらん、さつき言つたようにこの大きな木がお前が落ちてくるときにその体を張つてお前を守ってくれたんだよ。枝も沢山折れて、葉も沢山落としたが、おかげでお前はかすり傷と言つていい程度の傷と打ち身くらいですんだんだ。この世界はお前を歓迎しているし、私達もお前のこと大切に思つてゐるよ。」

ゼノンが少し恥ずかしそうに訥々とメイにそう真摯に語り掛けると少し落ち着いて考えれるようになつた。

そつか。この大きな木が私のこと助けてくれたんだ。すごいな。

守ってくれたんだね。

メイは改めてその巨木を見上げた後、タタタと木に近寄つて思いつきり抱きしめた。

木が暖かい。

田を闊じてそつと耳を寄せると鼓動のような音が聞こえた気がした。

「大木さん、助けてくれてどうもありがとうございました。」

メイがさわやかに木に語り掛けるとあたりから不思議な気配が漂ってきた。

「魔力？」

ゼノンがそういった気がしたがメイは不思議な気配がとつても気持ちよくてうつとりと田をつぶつていた。ゼノンの言葉でも癒されていなかつたメイの心の中の冷たくて固い物がするすると解けていくようだつた。

「魔力？」

ゼノンは「」で言つた言葉に随分と驚いた。この大木は確かに樹齢も恐ろしく長く、長寿なドワーフ族である自分の祖父の代にはすでに随分と大きかつたということもあり、少なくとも数千年は経っているのではないだろうか。そのため森の主のような気配を感じさせ

る」ことがあった。だが、魔力？

「この木から魔力を感じるなど初めてのことだ。

魔力といつても、特に何か意思を感じさせるものではなく、どちらかといえば穏やかな癒しの気配を漂わせている。メイがうつとりとしているのも不思議はないだろう。

メイに、この世界は彼女を歓迎しているといった言葉が図らずも本当のことのようだ。普段意思を持つものではないはずの巨木がメイを本当に守りうとする意思でもあったかのように彼女の大怪我を防ぎ、おそらく命を救い、今も親元を離れた可哀想な子供に暖かな癒しの魔力を注いでいるようだ。考えてみると、あの日に自分がこの森の奥の通常はまず来ないこの場所に導かれるように向かったことも偶然と思つてはいたが、まるで何かの意思の力で連れてこられたいたような気さえする。エルフ族の集落の方が近いのに、あのお気楽で薄情で怠け者なうえ移り気な連中ではなく、ドワーフである私が見つけることができた「この子」といっては幸いだったのではないだろうか？

今も小さな体をいっぱいに伸ばして嬉しそうにくすぐったそうに微笑みながら巨木を抱きしめるメイにさわさわと森の優しい風が吹き、彼女の茶色い巻き毛を遊ぼうよというようにゆすっているのも風の妖精のシルフどもの仕業のようだ。メイは気付いていないのかただくすぐつたそうに首をすくめるばかりだ。

本当に空から落つこちて来ちゃつたのかな？

この大きな木が助けてくれてなかつたら、そしてゼノンが見つけてくれていなかつたらどうなつていただろうと想像するどぶるひと震えた。本当に運が良かつた。

季節にしても、ここに来たときはもうすでに春の暖かさがあつたから。もう少し前にここに着てたら寒い雪が降り積もつてもしかしたらゼノンさんに見つかる以前に凍えちゃつてたかも知れない。ゼノンが言うようにこの世界に歓迎されてるって考えたらとつても嬉しい。これからどうやつたらパパとママのところに帰る方法を見つけられるのか、今はまだこのこともほとんどわからないのだけれど。

考えてもわからんことはしかたないよね。

寂しいけど、どうしようもない。このことは、今はわからなくてもこの世界のことをもつと知つていつたら分かるときが来るのかな？そして、何とか元の世界に帰れる方法を見つけたい。

私みたいにどこか違う世界からやつてきた人の事もしかしたらいるかもしれないし。

どこかで調べる事ができると思う。誰か知つてると思つ。あつとね！

メイは大木の癒しの力とゼノンの暖かい心配り、それにいたずらに吹いてはくすぐつしていく楽しい風のおかげでちょっとつらかった気持ちもあつという間に前向きに方向転換をしたらゼノンの心配そな様子に気付いて申し訳なく思つた。

ゼノンに大丈夫だよという思いを込めて今度こそ心から微笑むとゼノンもいつもの鹿爪らしい顔をほころばせて微笑んでくれた。

第八話 巨木と風の癒し（後書き）

また少し間が開いてしまいましたね。

できるだけ早めの更新を心がけたいと思います。

いつも読んでくださつてどうもありがとうございます。

誤字や文章のおかしいこといろいろお気づきの方はぜひ「お気づきの方はぜひ」遠慮なくご指摘いただくと幸いです。

第九話 ハルフのたぐらみ

メイが暖かくて気持ちいい癒しの魔法で包まれているのを見てゼノンがこの魔力がどこから来ているのかに気付いた丁度同じ頃、二人をこつそりと覗き見ている影がいることにどちらも気付いていた。

これはすごいや！

ウォレンは、自分の幸運に驚いていた。

いつものように明け方まで飲んで騒いで知らず眠り込んでいたらしく、目が覚めたらそこは集落に程近い、泉の近くだった。

一日酔いに痛む頭と昨日ギヤンブルで豪快に負けてしまったことを思い出して自分の運もこれまでかと帰ろうと思っていたときに物音に気付いてとっさに茂みに潜んだのが幸いした。

初め愚鈍で醜いドワーフの男が、ほつそりとした体の手足の長い栗色の巻き毛の少女といふのを見た時はてっきり我等美しいエルフの娘と一緒にいるのだと思い嫌悪に顔をしかめてしまつたが、よく見ると随分と幼い体つきでどうやらあの娘っ子はまだ幼い人間族の娘であることが分かつた。

このあたりではほとんど見かけない人間族、それも小さな子供と面白みもないドワーフの男が一緒にいるのを見たときはそりやあ驚いたが、それよりも話を聞いてるとこの娘どうやってか空からおっこちて来てそれでも助かつたようだ。

それだけでも十分いい儲け話になりそうな気配なのに、あれはどうやら精霊の愛し子じゃねえか？

エルフ族は精霊使いが多種族と比べてほぼ独占しているといっていいほど多いことでも有名だった。しかし最近は精霊の愛し子自体の数が随分減ってきて、精霊使いはなかなか手が少ない。それに加えて人間族で精霊魔法を使えるものはほとんどないため魔法使いどもは研究のためにかなりの数のエルフ族の精霊の愛し子を中原に連れ去つていった。おかげでエルフ族にはかなりの金が礼金としておとされたがそのことがもとで、本来ただ楽しいことが大好きで子供のように悪戯好きなエルフを享楽主義へと貶めたのだとウォレンは思つていて。今では酒とタバコ、ギャンブルにおぼれたエルフの若者であふれている。自分もそのうちの一人だということはウォレンも自覚してるが、いまさら昔の生活に戻れるとも思えない。あとはどれだけ楽しめるかだ。

精霊の愛し子は見つかり次第魔法使いどもが高値で買い取つてくれるることは周知の事実だ。その上あのわれ等エルフ族と並んでも遙色のない容姿。あれはきっと更に値を上げることに貢献してくれるだろうことは予想に難くない。そう思つとウォレンは思わずにたりと頬が緩むのを感じた。あとはどうやってあの娘っ子をあのドワーフの男から引き離すかだが、あいにく今は一日酔いで体調がいまいちだ。とりあえず、やつらがこの後にどこに住んでいるのかを確かめてから後のことはかんがえよう。

ウォレンは二つそりと二人の後をつけてゼノンの家の位置をしつかりと覚えると、一日酔いで痛む頭を抱えてとりあえず、魔法使いとの渡りをどうやってつけようかと計算しながらエルフの集落へと戻つていった。

第十話 精靈の愛し子（前）

テーノはメイが思つたよりも元気そうなのでほつとしていた。メイは背中にテディを背負つてゼノンと仲良く手をつなぎ、楽しそうにおしゃべりをしながら森の奥から帰つてきている様子を見てくすりと笑つた。

あの、ゼノンが小さな人間の娘の手を引いて森を歩いているなんてあの子達が見たらなんていうだろうねえ。

テーノはもうひとり立ちしてしまつた子供達が帰つてきたらどれほど驚くかと思つてくすりと笑つた。

ゼノンとテーノの子供は男ばかり3人。

もう、所帯を持っているのは一番上の息子のアルツだけだつた。アルツが独り立ちしたのは彼が10歳になつた年だったので、もう30年にもなる。それから結婚して可愛らしい嫁のバーダをもらつてからも10年ほどしか経つていない。一人に子供が出来るのはまだまだ先になることだろう。というのも長寿なドwarf族はあまり子供がすぐにできない。まだほんの40歳になつたばかりのアルツはまだまだ父親になるには早すぎるだろう。そのアルツは大多数のドwarfの若者同様鉱山で働いているが、賢者である父に一番似たのか賢く、その上地の魔法も使えるとあって、鉱山でも頼りになる技術者として働いていた。

次男のベルノはドwarfとしては珍しく、森で木こりとして働いている。彼も独立してもう20年は経つていてが所帯はまだ持つてない。兄弟でも一番腕つ節の強いベルノはてつきり鉱山で働くものだとばかり思つていたのに、集団で働くのが嫌だとこりになる道を選んだときはゼノンもテーノも随分驚いたものだつた。とはい

え、なり手の少ない森のきこりは周囲には喜ばれて、結果的にはもちろん体力の要るきこりの仕事は彼にぴったりといった。

三男のマルスはまだ独り立ちしてから数年しかたっていない少年だ。高名な細工師の下で修行中の細工師見習いとして頑張っている。マルスはまだもつと幼いころから工作が得意で綺麗なものが特別好きな少年だったので、細工師の道を選んだことはベルノのときと違つて両親共に納得のいく選択だった。しかし、なんといってもドワーフ族にとどまらず、世界でももつとも高名な細工師として有名なガドルの下で細工の道を学べるようになったと本人から聞いたときはさすがに驚いたものだった。ガドルは弟子を取らないことでも有名だったので。

三人の息子たちは、実家に帰つてくることはもう独り立ちしてしまつたので殆どないが、いつか彼らにこのかわいい人間の娘を見せにいつてあげたいな、などとテーゴは幸せに考えていた。

メイはゼノンに帰る道すがら、ドワーフ族に伝わる伝承をいくつか話してもらつている間にいつの間にかもう赤い屋根のお家に近づいてきたことに気が付いた。

テーゴが庭の手入れをしながらこちらを見て微笑んでいる。

「テーゴ、ただいま！」

大きな声でテーゴに声を掛け思いつき抱きついた。テーゴは小柄ながらもふくよかで暖かくてメイはテーゴに抱きしめてもらつのが大好きだった。

テーゴが何か楽しそうに笑つてゐるのを見て芽衣はなんだか分

からないが嬉しくなつたのだ。

「おかえり。メイ、ゼノンと一緒に森のお散歩は楽しかったかい？」

テーノはそんなメイをぎゅっと抱きしめ返した。彼女はもちろん二人がゼノンがメイを見つけた場所まで行つていたことを知つて、が、楽しそうな二人の様子にそのことには特に触れなかつた。ゼノンは妻が自分達が手をつないで歩いていたのを見て微笑んでいたのに気付いていたが、なにを思つておかしそうにしているのかは気付いていなかつた。彼自身は妻がであつて3ヶ月ほどの小さな人間の娘に注ぐ惜しみない愛情を感じて同じよう暖かな気持ちになりながら、普段は物静かで奥ゆかしい彼女が自分達の子供等が小さかつた頃にもあのようストレートに愛情表現をしていたなとほほえましく見ていた。

「うん。森の奥の綺麗な泉のところには見たことないお花が沢山咲いてたよ。カノの実はなんかあつちの方がもつと赤くて大きいし、大きなウサギや、鳥もたくさんいたよ。それから…」

メイは一度大きく瞬きをした後、テーノの目を見た。

「すつ」ぐ大きな木を見たの。その綺麗な泉のそば。にーんなに大きいの。てっぺんまでは首が痛くなるまでぐつと見上げても見えないくらいすつごく高くて、枝がたくさんあつてきらきらした綺麗な緑色の葉っぱがたーくさんついてたの。」

テーノも行つた事がある森の一番大きな木のことを思い描いていると、ゼノンがゆっくりとテーノに近づいてくる。

「ゼノンがわたしを見つけたのはそこなんだって。あんまり綺麗な場所でびっくりしちゃった。でも、たくさん枝も折れて葉っぱも落ちちゃったんだって。わたしが落ちてきたから。わたしの事守つてくれたみたいだって、ゼノンが言ってたわ。たくさんたくさん枝も、葉も落としてしまつただろうナビ……」

メイはそのことに罪悪感を覚えているのか、少し肩を落とした。

「だから、ありがとうってお礼を言つたらすつごく優しい気持ちをくれたの。なんだかふわふわする暖かくてくすぐつたものがぶわつてきたの。そしたらちょっと勇気が出た気がしてなんだか頑張りうつて気持ちになつたわ

メイはその後、思い切るように一気にそう言つて、興奮したように頬を紅潮させていた。『暖かくてくすぐつたいものがぶわつと?』なんとも子供らしい表現だが、それならテーノにも似たような経験があつたので、気が付いた。

少し伺うようにゼノンに目線を送つて見るとそうだというようにテーノにうなずく。

まだエルフ族とも仲が良かつた子供のころに一度……。その感覚は『癒しの魔法』ではないだろうか、とテーノは思ったのだ。癒しの魔法といつても、今メイが話していたのは精神的なものを癒すというか慰める『じぐじく』初級の魔法ではないだろうか?ドワーフ族は癒しの魔法は苦手でほとんど使えない。とはいっても、この初級の癒しの魔法ならば少しは使えるものもいる。大体、ドワーフ族で魔法が使えるものは鉱山で採掘時に使われる地系の魔法か、採れる石を加工する火系の魔法を得意とするのがほとんどだ。

ドワーフ族では怪我をしたときも癒しの魔法を使えるものはほほいないので、薬草を使った治療が通常だ。そして賢者と呼ばれていたがゼノンも魔法の行使に関してはあまり得意ではなかつた。

では誰が初級とは言え、癒しの魔法を?

「大木だよ。
」

第十話 精靈の愛しナ（前）（後書き）

九話が随分と短かったので、十話を少し早めにアップしました。
何か、おかしな部分お気付きの方がいらっしゃったらぜひお気軽にお知らせください。
ありがとうございます。

第十一話 精霊の愛し子（後）

「大木だよ。」

ゼノンがまるでテーノがなにを今まで考えていたのかを読んだようになつた。

「大木が？」

植物が魔法を使うことはありえるのだろうか？確かに植物には存在そのものから癒しを感じることははあるが、魔力としてはつきりと確立した癒しの魔法を使う植物？今までそのようなことは聞いた事がなかつた。

二人が会話を見て退屈になつたのか、庭で今までテーノが使つていたじょうろを使って「お手伝いするね」といい、庭のあちこちに自生している可愛らしい花に水遣りをしているメイを見ながら不思議に思ったので、夫にそう聞いた。

「ああ。私もそのことは疑問を感じたのだがそれはおそらく精霊の力ではないかと思う。」

ゼノンの言葉にテーノは固まつた。

「精霊？ゼノン、つまり木の精霊が？でも、木の精霊なんてほとんど見かけることもないのに！」

「おそらく長い歳月を経てあの木にも木の精霊が宿つているのではないだろうかね。あの子が大木に抱きついているときに感じた

波動は確かに癒しの魔法だつた。木の精霊は風の精霊よりも生まれる数がすくないうえ、木むずかしやなので、愛し子の守り手とはなかなか見ることがないから今まで気付かなかつたがね。そういう、風の精霊といえば、その時周りの精霊が随分騒いでいてシルフなどはメイの髪の毛に絡んで遊んでおつたよ。」

ゼノンはそれから少し考えるより手を細めて続けた。

「想像だがね。おそらく、あの日メイははどうしてか空から落ちてきたところを風の精霊によって落下速度を和らげてもらい、木の精霊に体を使って衝撃を受け止めてもらい、そしてまた癒しの魔法で大怪我を免れたのではないだろうかというのが今日の感想だよ。もしかしたら他の精霊も何がしか手伝ってくれていたのかもしけないが今となつては分からぬがね。ほらあれを見て『じらん』

テーオはゼノンの指差す先で楽しそうに水遣りをしているメイを見た。

「？」

メイが楽しそうに笑いながら水をやると水がきらきらとはじけそこに虹ができている。今まで吹いていなかつた風が楽しそうにメイの栗毛をくるくると絡ませる。花達はまるで競うようにメイに見てもらいたいのか芳しい香りを漂わせ、一生懸命花弁を開いて可愛らしく揺れている。

「え？」

精霊がメイと戯れているのだ。

「精靈達の愛し子だよ。」

ゼノンが事実を淡々と述べるよつこいつこつた。

「まさか」

テーノがつぶやくよつこいつこつた。

「だって、あれだけでも、多分、水と光と風、それに花の精靈まで？そんなにたくさんのお靈に愛されるなんてあるのかい？だって今までそんな気配、気付きもしなかつたのに…。」

ゼノンも少し首をかしげた。

「そうだ。あの子の怪我が少なかつたことも、ただ単に運が良かつたのかもしれないと今まで特に疑問に思つていなかつたんだが。」

「じゃあどうやって精靈の存在に気付いたんだい？私は今までそんな様子ちつとも…。」

テーノが言つのもむつともだつた。今まで魔力を感知したことはなかつたように思える。

「私もあの子があの大木に抱きついてそのときに魔力を感じなかつたらおそらく今も気付いていなかつたんじやないかと思う。あれはあの子自身は気付いてないみたいなんだ。ほら、それというのもあの子をいま取り巻いている精靈達には随分弱い力しか感じないだろ？おそらくあまりにも微弱な魔力で魔法を使えない私達には気付くことができなかつたのだと思つ。」

ドワーフ族も魔法の使えるものもいるがあまり一般的ではない。この世界に生きるものは魔力 자체は誰でも普通に持っているし、感じることができるが、自然とともに生きるドワーフはあるがままに自然の恩恵を享受する生活を基盤にしていて、言霊魔法はもちらん問題外だが、一部の特殊な立場のドワーフしか精霊魔法を使えるものはいなかつた。ゼノンもテーノも魔法は門外漢だつた。とはいえ、ゼノンも賢者。知識としては並みの魔法使いよりは魔法について詳しい。

「それはおいといてもあの子自身が魔法の使い方も知らないから大きな力の精霊はあまり干渉してきてないのではないかと思う。強すぎる魔力が近くにあると使い方を知らないあの子はおそらく己の内で反応する魔力が暴走して精神に異常をきたしてしまうだろうからね。おそらく力のある精霊はあの子が逆に傷つかないように直接干渉せずそつと見守っているんじゃないだろうか。」

精霊はあちらこちらにいるものだが、あまり精霊の気配を感じることはない。彼らが通常ドワーフ族も含むヒト（ヒューマノイド型の種族全てを含む）に干渉することはほんないからだ。「精霊の愛し子」というのは珍しく精霊が干渉をしたがるヒトに対して使われる言葉だ。精霊のただの気まぐれだと、その子の魂の波長が精霊をひきつけるなどといわれているが、実際、なぜ精霊達がそのヒトを気に入つて干渉したがるのかは分かつていない。ただ一般的に、精霊は一種類の場合が通常であり、精霊の好みは種類によつてかなり大幅に異なるので今メイの周りにいるように何種類もの精霊が競うように干渉することなどは考えられなかつた。

精霊魔法が使えるものの絶対条件として精霊の愛し子であることがあげられる。そして、その使える精霊魔法は干渉をしてくるその精霊の属性に限られる。メイは鍛えれば数種の精霊魔法を使える使

い手にさえもなれるかもしない。精霊使いは数が少なく引く手あまただ。このことがメイの今後に悪い影響を与えるなければ良いが。テーノは悪い予感が当たらないようドワーフの守り神に祈り、不安になりながらメイを見つめた。

今となつてみればこれほど下級とはいえ、多くの精霊に愛されて囲まれているメイに気付かなかつたのは本当に不思議だつた。確かにメイが来てから一の月が三度満ち欠けを繰り返すほど時が経つて、いつもの年よりも恵みが大きかつたことに初めて気付いた。森で採れる果物は大振りでおいしく、野菜も豊富だつたし、狩もいつもよりもうまくいくことが多い。険しい山を流れてくる雪解け水は例年より更にすんでおいしい。泉の水も同じく透明度が高く、甘くておいしい。庭に自生する野生の花々は彩りも鮮やかで種類も豊富で、香りが良いものが揃つている。これも全てまさかメイの為に？

メイは精霊に気付いているのかいないのか、可愛らしいお花に微笑み、水を振りまくたびにできる虹に大喜びしていた。風の精霊のいたずらにはどうやら参つてゐるのか時々くすぐつたそつと首をくめていた。

マルスの一日は朝日が出る前に起きだして師匠の家の作業場まで通うことから始まる。

マルスの家から師匠の家までは歩いてもほんの数分で、まず作業場の片づけがすんだら、注文を受けている細工物の確認をし、師匠の朝食の準備を済ませる。

師匠がやって来ると朝の挨拶をし一緒に自分の食事も済ませ、その後は昨日までに仕上がった細工物で、商店に売り物とし下ろすものを持って、ドワーフの森のもつともにぎやかな街中まで行かなければならない。

その後その脚で材料の仕入れに鉱山近くの商店まで向かって荷を届ける約束を取り付けたらやっと昼の休憩をもらい、午後はたっぷり師匠の指導の下、細工物を思う存分作ることができるのだ。

マルスは師匠の下で修行をするのが大好きだった。『まじまとしかつた。』

師匠はガドルという名前で器用で細工物が得意なドワーフの中でももつとも高名で、なかなか弟子を取らないことで有名だったのでも、マルスが10回目の誕生日を迎えたその日に弟子入りを願い出たときには、即刻断られたことも周りは誰も不思議に思わなかつた。

マルスは一度断られた位ではまったくへこたれず、優しげな風貌に似合わず頑固なところのあるドワーフらしさで何度も断られても、毎日弟子入りをお願いしに師匠の下に通つた。

その頃、同じように弟子入りを願う、マルスと同年代の数人もマルスに習つて弟子入りのために通つようになつたが、時が流れ、少しも願いを聞いてくれないガドルにだんだんと熱が冷めたのか、一人、また一人と脱落していった。

それでもあきらめないものが三人残つたのは1の月が3度日に満月を迎える頃だった。

師匠も、これほど長い期間へこたれずに毎日通うマルス達を見て、とうとうほだされたのか、一度だけチャンスをくれるといつ。彼ら三人の腕を見るためにいくつかの鉱石の入つた箱を渡し、それらを使って三日後までに特別な誰かのための特別な贈り物を作るよつに言つた。

マルスは目の肥えたドワーフの若者なのでもちろん渡されたそれらがいわゆるくず石と呼ばれる価値のほとんどないものだとは一目で分かつていて。

マルスはじつとその石を見つめ、いつたいどうしたものかと考えた。

一人はその石を見て怒りに顔を真つ赤にして、師匠に食つて掛かつた。

「あなたはなんてひどい人なんだ！こんなくず石で僕らになにが作れるというのですか！もうたくさんだ。俺はこれ以上あなたの弟子になろうなんて気にはなれない！」

彼はそつこつて、憤りもあらわに立ち去つた。

もう一人はマルスと同じように考えるよつじつと見ていたが、何かいい方法を思いついたのかそれらの石の中でも色が比較的美しく、大きいものをいくつかマルスが何か考えるよりも先に取り出すと、出来上がつたら持つてきますと言つて去つていった。

師匠は、やはり僕のような者は弟子にできないと遠まわしにこのような方法で伝えようとしているのかな？

マルスは考えるようにしていたが、その時師匠の真剣に探る様に自分を見る姿を目に見て腹を決めた。マルスはじっと箱に残った沢山の石を見ていたがどの石も少し輝きが足りなくて美しい細工物などできそつもないものばかりだ。でも、それならば…。

「分かりました。」この石を使って、特別な人に特別な贈り物を作ります。」

マルスもそういうて、師匠が何か言う前に箱」と全てを持って自分の家に帰った。

マルスは三日かけて、自分が思うとおりのものができたと確信できたので、それを持って師匠の下に向かった。

「どうですか？」

すると、師匠の家から最後に残ったもう一人の弟子候補のデミタがすでにきているようだつた。デミタの期待に籠もつた声を聞いてマルスはいつたいどんなものを彼は作ったのか気になつた。

「ふむ」

師匠はそういうと手に持つていたデミタが作ったと思われる首飾りをじつくりと観察した後、デミタに返した。

「これは、誰に贈るつと思つて作ったのだい？」

ガドルがそう聞いたときデミタが一瞬はつとしたように見えた。

「これは……、ああ、ゴルンに、ええ、ゴルンに渡そうと思い作

りました。」

マルスはそうっと近寄つてその首飾りを見てみた。
デミタは先日師匠にもらつた石を使って美しい首飾りを作つていた。

マルスはあのくず石でよくこのようなど一瞬感心したが、真ん中にはどう見てもそのときにもらつたものとは思えない美しい真っ赤なルビーと思われる宝石を配していた。

確かにガドル様はくず石以外を使つてはいけないとは一言もおつしゃつていなかつたが……コルンに? コルンはドワーフ族の若い娘たちの中でもおしとやかで一番美しいと評判の娘だ。

「マルスも作つたものを見せなさい。」

師匠はマルスが来ていたことに気付いていたらしく振り返りもせずそういった。

マルスは盗み聞きしていたのがばれてずかしくなり、さつと顔を赤らめたが、気を取り直して持つていたものをガドルに手渡した。

「なんだそれは? そんなくず石ばかりで作つたのが小さな箱一個?」

デミタは、ガドルに聞こえないよつこつそりとマルスに向かって鼻で嘲るよつに笑つた。

マルスは顔がまた赤らんでくるのを感じた。確かにデミタの美しい宝石の輝く首飾りの後には自分が作ったものは華やかさに足りずつまらないもののように感じてしまった。

「これは?」

ガドルは、マルスに聞いた。

「はい、これは母に贈る宝石箱にと思い作りました。」

ガドルはじつくりと宝石箱を観察していた。マルスの宝石箱は、平凡ながらも良く磨かれて光沢のある檜でできた木の箱にガドルが渡した石を、微妙にグラデーションを変えて配置しており、地味ながらも美しく近づいて見るほどに丁寧な仕上がりになっていた。石は丁寧に研磨して一定の大きさに揃えた後、輝きはすぐないながらもそれにある持ち味を生かしてあるのがガドルの目にはちゃんと見えていた。

特別なしかけはないが、それゆえにこの宝石箱に入る本物の宝石を引き立てるのにはまさしくうつてつけの素晴らしい脇役としての石の飾りとなっていた。

「デミタ、これを見てどう思つ?」

ガドルはふと顔をあげるとマルスではなくデミタに聞いた。

「え? どうも何も、平凡で大して美しくもないつまらないものにおもえますが。」

デミタは躊躇なくそう答えた。

「マルスはデミタが作ったものをどうおもつ?」

今度はマルスに問うた。

「はい、真ん中の宝石が美しい首飾りですが……、あまりそのほかの石が生かされてなく、またヨルンに贈るには少し大人っぽすぎ

るよりに思えます」

マルスはユルンの可憐で優しげな雰囲気にこの毒々しいほど真つ赤なルビーがついた首飾りはあまり似合わないだらうな、と思いながら答えた。

「ふむ。2人とももう帰りなさい。マルスは明日、日が出る前に工房まで来なさい」

ガドルはそれだけ言って立ち去るうとしてしまった。

2人はあわててガドルを引き止めた。

「ガドル様…どうこう」とですか！俺ではなくこのマルスを、マルスだけを弟子にとるとおっしゃるのですか！」

マルスはそれを聞いて初めてガドルが言つた意味が分かり喜びが込みあがつてきた。

「本当ですか！僕を弟子にしていただけるのでしょうか！」

ガドルは振り返つてそれぞれを見つめた。ふうっと大きくひとつため息をつくと、珍しくたくさん言葉をくれた。

「デミタ、お前は細工師として大事な事が分かつていない。確かにお前の作った首飾りは美しいが、それだけだ。それもその美しさは半分以上その宝石の為。それもまたよからう。もしもお前が私の渡した石を理解して、そのちこさな美しさを活かしていたのならばな

ガドルはそうこうとデミタに彼の作った首飾りとマルスが作った

宝石箱をよく見るようにと渡した。

「ミタははつとしたように自分の作った首飾りに目を落とした。そこには確かに適当にしか磨かれていらない小さなくず石たち。マルスの宝石箱をそつと見やるとそこには宝石と呼ぶに足りないとはいえ、すでにくずと呼ぶにふさわしくない、ひつそりとした輝きをもつ石がそつと静かに並んでいるのが見える。暖かな気持ちにさせるようなやわらかい色で統一されたそれらは、マルスの母への優しい想いが伝わってくるようだつた。

特別な人の為に特別な物をといったガドルの言葉の意味も忘れていた。ただこの競争に勝つことに気をとられ、誰に贈るのかも考へてはいなかつたのは明白だつた。そうだ。マルスが指摘したようにユルンにはこの首飾りは似合わないだらう。ユルンの為に本当に作つていたならばせめてユルンのうつくさにあつた淡い色の宝石を配するなど他の工夫ができたはずだ。

「くず石と言われる石にも美しさはある。それを引き出せることで、一流の細工師となれるのだ。初めから石の価値にのみとらわれ本来の美しささえも見ようとなかつたお前には思いをどれだけ石にこめられるのかが重要な細工師としては一流にはなれないだらう。」

ガドルの言葉を聞いてミタは初めて己の失敗を知つた。

「マルス、お前の作品は荒削りだが才能を感じさせる。石を丁寧に扱う心構えもできているし、お前の母親への優しい思いもその箱にはこめられている。私の元で本気で修行をする氣があるのなら、明日の日の出前に工房まで来ることだ。さあ、おまえの作った箱を持って母の元へ帰り、このことを報告してきなさい。明日からしばらく忙しくなるので、お前には弟子としてしっかり働いてもららうからな。」

そういうて今度こそ2人が何も言ひ前に立ち去つた。

マルスは感極まつて何も言ひことはできなかつたが頭を下げて見送つた。

デミタは呆然としていたが、もう一度自分が手に持つているその首飾りとマルスの一見平凡な宝石箱を見比べた後、マルスにおでとつと声を掛け、去つていつた。

マルスは、弟子入りしてからしばらくは全く細工物に触ることはないなかつた。

師匠は身の回りのこまごまとしたことから、人間のトレーダーとの交渉からまた、ドワーフ族の鉱山で石を直接買い付けることまで細工に関係のない仕事をとにかく朝から晩までさせられる毎日になんだんと焦りを感じていた。

いくら辛抱強いマルスでも弟子入りしてからもう一年以上ものこのような仕事ばかりを任せられていると弟子とは名ばかりで本当は小間使いが欲しかつただけなのかも知れないと疑問に思うことも少しつかうだつた。

実際、弟子入りを同じく目指していたテニタなどは他の細工師に弟子入りし、すでに沢山の作品を作つてゐる。

師匠の言つてつけを守り、任せられた仕事を黙々とこなしながらもとうとう我慢ができなくなつてしまつた。

「師匠！僕はいつになつたら師匠に細工師として鍛えていただくことができるのでしょうか！？」

ガドルはそれを聞いて「ふむ」と一言つなるとじつとマルスを見た。

マルスは早まつたことを言つてしまつたかもしだれないと、一瞬後悔したが、これ以上この惨めな気持ちのままでいられないと勇気を振り絞り、師匠の目を見返した。

ガドルはマルスのその目をじつとこりむように見つめた。

「お前はそれではいつたい今まで私なのにを見ていたのだ。弟子入りしてからいつにを学んだのだ。今日はもう家へ帰れ」

ガドルはそれだけを告げるとさつさと自分の作業に戻り、もうマ
ルスを見ることはなかつた。

マルスはその言葉にかつとなり、そのまま作業場を走り去つた。もうなにがなんだか分からぬままに走り続け、気が付くと鉱山の方から続く川のほとりに来ていた。

師匠は分かつてくれない。やつぱり僕はただの小間使いだつたんだ。

マルスは知らず涙を流していた。

「おい、お前、ないてるのか？」

マルスははつとして急いで日元を袖でふき取り振り返つた。

תְּמִימָנָה - מִתְּמִימָנָה

そこに立っていたのは今一番会いたくなかったデミタだった。

「どうしてって、お前、ここは俺の師匠の作業場から近い川場だぜ。」
「それで、鉱山から流れてくるくず石を拾いに来たのさ。」

デミタはそういった後、マルスの顔を見て一瞬驚いたように目を見開いた。

「お前、どうしたんだ?なんだ、本当に泣いてたのか?」

マルスは恥ずかしくなつてうつむいた。

「何だよ。ガドル様になんかいわれたのか?」

『トリミタはそいつとマルスに聞いた。その声は、なんだかどつても優しくてマルスは思わず口頭思つていたこと、そして今日ガドルに言われた』ことをトリミタに言った。

「ふーん。お前甘えてんな。」

トリミタはそういうとマルスのことは気にせず石を捨い出した。

「ああ、お前俺がなんでこんなことをしてるのか気になってるな？」

トリミタはマルスの驚いた顔を見てくすくすと笑った。

「おれさ、あの時お前にあのくず石のこと負けたときすっげく悔しかった。お前が作ったあの箱、本当はずしく綺麗だと思つたさ。でもお前に負けを認めるのが嫌だつたから……。あれから今の師匠に拾つてもらつてもあの時のことが忘れられないんだ。ガドル様はやっぱり凄いし、あの時の言葉が凄く引っかかるて、おれくず石でもいい飾り物をつくらうつて決めたんだ。だから今は仕事の合間にそのための石を拾つてゐるわけさ。」

僕は今までなにをしてきたのだらうへ師匠に聞こつけられたことに唯々諾々と従つていたが……。

トリミタはあの日、負けた後きちんと学んでいた。

僕はどうだつたろう。ただ弟子にとつていただいたことに喜んで、何も学ばなかつたのか。

あれから師匠はいろいろと細工師に必要な基礎を教えてくださつていたのに。

デミタは忙しい中、自分で自分の作品を作ろうと合間に時間を見つけて頑張っているのに。
それなのに、僕は師匠が何も教えてくれないとただ師匠に文句を言つただけだ。
恥ずかしい。

「テミタの話を聞いてから、マルスは今までの行いを振り返っていた。

恥ずかしい。

弟子入りを許されたときの気持ちをすっかり忘れてしまっていたんだろうか。

マルスは川辺に座り、しばらく川面をじっと見ながら考えていた。

「マルス？ こんなところでボーッとしてたら風邪ひこけやうわよ

声が後ろから聞こえた。

マルスが振り返るとそこにはゴルンが立っていた。

「ああ、ゴルンか…。」

ゴルンはテミタが以前作つた首飾りのときに言い訳に使つた美しいドワーフの少女。

ガドルの纖細で美しい作品がとてもよく似合つ少女で、ガドルの作品を沢山扱う装飾店の一人娘だ。マルスとは幼馴染で子供の頃から付き合つてたが最近は工房に直接来ては、まだお店に出ていない装飾品でいいものがないか探しにやってきてはおしゃべりをして帰り、マルスとも前より仲良くなつていた。

「もうすぐ日が暮れるわよ。早くうちに帰らなこと。」といふ。

ゴルンが眉根を寄せながらマルスの元まで歩いてきた。

「

「うん。でも、なんか今はもう少しっこいみたいんだ。」

少し肩を落としてマルスはまた川面を眺めた。ゴルンは少し驚いたようにマルスを見た。

ゴルンはガドルの工房で久しぶりに会ったマルスを子供のときの恥ずかしがりやで兄の後ろに隠れてばかりだった頃の印象のままだのおとなしい少年だと思っていたが、だんだんとその芯のしつかりとしたマルスの内面に触れ、折につれ工房によつて少しおしゃべりをすることが楽しみになつていた。

そのマルスが小さな子供のように体を丸めている。ゴルンはふうとため息をひとつついた。

この様子だとマルスはまだしばらくなつた。ゴルンは静かにマルスの横に座つた。

「ゴルン、ゴルン！」こんなにいたいよつた。ゴルンは

マルスは驚いてゴルンのほうを向いた。

「だつて、マルスはまだ帰りたくないんでしょう？マルスつたらほつとくと絶対いつまでもここにいて風邪引いちやうのよ。そして後悔するんだわ。」

ゴルンが淡々と川面を見ながらうついた。そして静かに「聞いたの。『ミタ』に。」とつぶやいた。

「マルスは私のことどう思つてるかわかないけど、私はあなたのことをお友達だと思つてゐるわ。私だって父さんと母さんのお店で働

いてるけど、まだ任せてもうまいことほんの少し。マルスが焦る気もすこじはわかるつもりよ。でも、マルスは何も言つてもくれない。

「ゴルンがなんとなく寂しそうに顔をかんでるのを見てマルスははつとした。

「「「めんね。ゴルンがそんなに心配してくれているのちつとも気付いてなかつたよ。ぼくは自分の事で精一杯で、自分の事ばかり考えてたんだね。」

そういうてマルスは着ていた上着を塞ごにしてゴルンにそつとかけた。

ゴルンと語り合つた後、マルスは破門されるかもしぬないことを覚悟で工房にもどつた。

ゴルンと話して気付いたことが沢山あつた。

焦つても仕方がないんだ。僕の成長に合わせて師匠が教えてくださつてていることに気付けていなかつたんだ。そしてガドルに心から謝つた。ガドルははじめひどく怒つていたが、マルスの真摯なそして澄んだ茶色の瞳に光る深い決意を見てそれから一ヶ月、工房の出入りを禁じることで許してくれた。

一ヶ月後にガドルの元に戻つたマルスはその一ヶ月の間に心のままに作つた作品を携え改めてガドルに許しを請うた。

ガドルはじつとマルスの目を見つめた。そこには一ヶ月前と比べて更に成長した瞳があつた。ガドルはそつと満足そうに目を一瞬眇

めた後、作品に目を落とした。

そこにあつたのは宝石のかけら、いわゆるくず石を用いて作つた二揃いの工具だった。

ひとつは師匠への感謝を込めて。もうひとつは自分自身への戒めの思いを込めて。

工具自体はマルスの専門外なので、自分の目利きを最大限に活かして最も優れた工具を街で買い付け、その元は無骨であつた姿を美しく変えていた。

丈夫で長持ちな木材で有名なオーリスの木はきこりをしている一番目の兄のところで兄の為に新しい斧の飾り部分を作る約束で譲つてもらつた。

美しい宝石は一番上の兄のところで、使わないかけらの部分をやはり採掘に使うつるはしの飾りを作ることで譲つてもらえた。

どちらに行つたときも、師匠の作る最高品質の材料に普段から囲まれていることが普通であつたため、また毎日のお使いでよい品を見分けるほうを学んできたため、一つ一つ見せてもらつた材料の候補を自分自身で、傷の具合、密度、乾燥の度合い、色、年数などいろいろな角度から目的に合わせて候補を絞るマルスに兄たち感心していた。

兄たちにたくさんある候補の中から良いものを選んだと褒められやはり今まで気づかない間に教えていただいていたのだと、師匠の偉大さに気付かされたことも思い出した。

一つ一つガドルは手に取つて出来をみた。それぞれの工具はグリップの部分は、ただ布を木に巻いただけであつたものを次兄の所からもらつてきたオーリスに取り替えてあつた。持ちやすい大きさに丁寧に削られ、砂石で時間をかけて磨いたのでほとんどやわらかく感じるほどガドルの手のひらの中でしつくりときた。また、後ろの

方には美しい彫刻を施しこじろにガドルの守護星と同じ赤を基調にした小さな宝石のかけらを使って邪魔にならない程度に美しく配置してある。

丁寧に丁寧に扱われたことがわかるひとつひとつ道具にガドルは珍しくふつと笑みを浮かべ、マルスの頭を勢いよく「ゴシン」と叩いた。地味に痛かった。

「丁寧に仕上げたこの持ち手の部分はわしの手によくなじむ。まあ、悪くない。だが、肝心の細工はまだまだこれからだな。」

普段は驚くほど纖細な細工を作り出すその拳はドワーフの例に漏れず力強く、少し涙目になつたのは秘密だ。

「お前には教えることが沢山あるようだな。これからはもう少し直接教えてやることにしよう。」

マルスはそれを聞いて痛みも吹っ飛ぶほど喜んだ。

ガドルはまだまとは言つていたが、マルスが細工し飾つた工具をすぐに前のものと交換して使つてくれるようになった。

それからのマルスはガドルの指示を待つだけでなく、自分用に作つた、まったく同じだが、少し飾りが質素な（マルスは自分の守護星の色、緑の石を控えめに使つていた）自分用の工具を使い、暇を見つけガドルの技を盗み、空いた時間にその技術を応用してできるだけたくさん作品を作るようにしてきた。

そして、季節はまた何度もめぐり、マルスは才能あふれる細工師の若者としてだんだんと名が売れ始め、自分を指名する客もぼちぼち現れてきた。

ゴルンの店でも、ガドルの作品と並んでマルスの作品も沢山おかれるようになつた。

時々ガドルほどの作品を買つことができない若い女の子達が、ガドルほどの腕前はまだないとはいえガドルに鍛えられているマルスの、高価でない美しいアクセサリーを求めてやつてくるようになつたのだ。

マルス自身はガドルの唯一の弟子として恥ずかしくない作品がやつとできるようになつてきたとようやく感じれるようになつてた。

母のテーノが、メイをつれてやつてきたのはそんな頃だつた。

第十五話 火の精霊

本来、メイが精霊の愛し子であることは、この世界にやつてきたときに精霊の力で守られていたんだことからもわかるように、もちろん良い面もある。

しかしメイ自身が自分の魔力をコントロールできない為に周りには低級の精霊しか近寄れない。その為、基本的に少し運がいい程度にしかメイに作用ができるいない。これでは逆にメイへの危険が増えてしまっただけのようだ。

メイ本人に、彼女が精霊の愛し子であることを伝えることは大変重要であるとはゼノンにもテークノにも良くわかつていた。

言わないでいてもいいことは何もない。本人が魔力をうまく制御し、精霊をきちんと使役できるようにしないといこのままでは身の危険に繋がる。

田はとつぱりと暮れ、長歩きして疲れたのだから、メイはちよつと眠たそうに田をこすつていたが、今日は大事な話がある。我慢して起きいてもらわないといけない。

三人は家に入り、キッチンにある木の年輪がそのまま意匠となつている分厚くがつしりしたテーブルに座つていた。表面はゼノンとテークノが結婚したころからもうずっと使われてきたので綺麗な飴色にいくつも細かな傷がついているがそれも味わいになつていて。壁にかけられた ランプに灯された火がゆらゆらと影を作る。テークノが淹れてくれたハーブティーを一口飲んでゼノンは何から切り出すか考えた。

この3ヶ月ほどの間に、言葉を教えると同時にこの世界で生活していくうえで必要とゼノンが判断したものはテークノと協力して殆ど教えてきた。

しかしそれらはドワーフ族の習慣をもとにしたもの。

テーノが中心に教えていたのは食べられる種類の植物の見分け方。初めてみた食物を毒がないかテストする方法、飲み水を確保するために水が安全かテストする方法、獣や鳥をわなにかけるやり方。食べ物の調理法、衣服の縫い方、修繕の仕方も教え込んだ。体がどう考へても同じ年頃であろう一族の子供たちよりも弱弱しいメイをつれて森を歩いて、体力もつけさせてきた。

ゼノンも、文字の読み書きができるようになつたメイに、この世界の地理を、どのような民族がどうやって暮らしているのかを教えたり、星や日、そして月の位置から距離、方角を読む方法などを教えてあげていた。メイは自分でもゼノンの秘蔵の書物を許可をもらつて読んだりできるまでになつていた。

さらには一般的ドワーフ族は特に細かくは知ることはないのだが、ゼノンは賢者として、暦を読むことも仕事のひとつであった。

本来、メイにも教えるつもりはなかつたのだが、彼女が月を毎日数えていたことから、彼女の世界では当たり前に暦を読むことを知り、メイにならば理解できるであろうと教えることにしたのだ。

比べてみて面白かつたのは一年の長さ。メイの世界地球では12ヶ月、365日で一年が巡るとか。ここでは地球と違い、一年が48日に及ぶこと、一年は16ヶ月。月は28日で一月とすること。季節は4つ。春夏秋冬それぞれ4ヶ月ごとに季節が変わること。ドワーフ族には時計の感覚がなく、一日を人間のように細かく分けていない。日が昇り、それから中天に昇るまでが午前中で日が落ちるまでを午後。日が昇ると起き、日が落ちると眠る。ドワーフ族は何千年もの間そういう暮らしをしていた。

また、村での買い物の仕方、通貨について。これらはまだ実際に村に連れて行つたことがないので、メイは実践では経験していないが、硬貨の見分け方と、ドワーフ族として最も大事なことだが宝石であるそれぞの輝石の価値の見分け方などを教えてあげた。まだまだ教えたりないことはあるとは思つていたが、魔法について

は特に必要性を感じず、後回じにてしていじたことがここにきて問題となってしまった。

メイの癒しの魔法を受けたときの反応、また普段から精霊の干渉を少なからず受けているにも関わらず、まったく気にした様子がないこと、それに魔法に関する質問を今まで一切ゼノンたちに聞いてきたことがないことから推察されることがある。

「メイ、お前はおそらく魔法が普通に存在していない世界からやつてきたのではないかな。」

「この世界では魔法は一般的に云うと良く使われている。エルフ族はいまだに精霊の愛し子がもつとも多く、精霊使いもそれに伴い多い。とはいえ、最近はなぜか新たな精霊のいとし子の数が随分減っていると聞く。これも最近の退廃ぶりが悪く影響しているのだろうか？」

「もしも魔法が普通に意識に上るような生活環境からここに來ていたのならば、お前ならばおそらく魔法に関する質問をしていただろうね。」

「そうね。それにこれが私たち薙あるドワーフ族でなければメイももうすでに魔法には触れることが生活の中であったでしょうね。わたしらの中にいて普通に生活をしていたら魔法に触れることはまずないからね。」

メイは驚いて田舎者ごへりつさせた。『マホウ』？ しらない単語。

「マホウ？」

「おや、魔法のことも話していなかつたのかい？まつたくゼノンときたら。魔法は人間族にとつては基本だろ？きちんと教えておいであげないところの子が困るよ。」

メイが魔法についても知らないことを聞いてテーノは片眉をあげて感心しないといわんばかりにために大きくため息をついた。

「魔法は簡単に言うと、手足を使わずに頭と体内にある魔力を使つて事象を起こすことをそういうんだよ。大きく分けて、精霊魔法、詠唱魔法、そして身体強化の3つの魔法が主なものだね」

ゼノンは苦笑すると、メイに魔法について説明することにした。

人間族は精霊の愛し子が出ることは大変少ない。その代わり呪文を使用する詠唱魔法は日常的に使わないもののほうが多い。

たとえば料理に火の魔法や、水の魔法を使つたりといった程度の低レベルの物ではあるが。

そして、なんといつても「魔法使い」と呼ばれる輩たちはこの人間族のうちの魔法を得意とするものが特にそう呼ばれている。

魔法使いはその他の簡易魔法のみを使用できる一般の人間族と違ひ、攻撃的で、最近とみに中原に増えている魔物達との交戦時などに特に魔法を好んで使用する。

四足歩行の獣族は遺伝的に呪文を使う魔法を使えるものはいない。この種族は特殊で個体毎に差はあるとはいえ、自分ではコントロールできない身体能力強化の魔法がほぼ生まれたときからかかっていることが殆どだ。訓練をつめばこの強化魔法もコントロールが利くようになるが、他者に対してかけることはできない。

因みに人間族との混血である一足歩行の大型の獣族は人間族と同程度に詠唱魔法を使えるものも多いが、純粹な獣族と比べると身体

強化が劣る。

またすこし横道にそれるが、獣族と似て非なるものとして、聖獸、魔獸がある。

聖獸は、その名のとおり、聖なるものであり、聖なる力を持つているとされる伝説の獸。

魔獸は、その名のとおり、魔なるものであり、魔の力を持つているこれは伝説ではない獸。魔獸は魔物の一種で、獣の形態をしているものが魔獸と呼ばれている。最近はちらほらと発見例が報告されており、近いうちにドワーフ族たちのすむこの森にも出でてくることも考えられるので警戒が必要と言われている。

話は戻るが、人間族、エルフ族、獣族と違いドワーフ族は本来、魔法を使える種族ではあるのだが、普段の生活に魔法を使うことはほほない。使うのは魔力を秘めた石である魔石を加工するときと、鉱山での採掘時に地の魔法で空間を安全に確保すること一部のドワーフ族が魔法を使用する。

テーノは自分ではコントロールできない獣族は良いとして、たとえば料理等日常生活の為に、詠唱魔法を使用している人間族や精霊を使役しているエルフ族などを思い出していやそうに首を振った。ドワーフからみたら、簡単に魔法を使用することは便利さに慣れすぎてしまいそうでおそろしい。魔法が万が一使えなくなつたときなどに頼り切つていた反動がくるのではないかと考えできるだけ魔法を使わなくてもできるることは自分でするよつにしているのだ。

「『魔法』か。うん。そういう言葉はあるけれど、わたしの周りには普通になかった言葉だわ。聞いたことがあるのはお話しの中と、『ゲーム』の中。わたしは使えないし、使える人も知らなかつた。」

『マホウ』を魔法だと認識したメイは今ゼノンとテーノに言われたことを頭の中で反芻してみたが、なぜ突然、ドワーフの中ではあまり必要とされないその『魔法』について、こんな時間に聞かせようとしているのか不思議に思つた。

「実は、お前にきちんと話しておかないと困ると思つてね。」

ゼノンは、メイの考えを読んでいたかのようにうつ言つた。

「今日は、遠くまで歩いていったけど、あの大木のもとで、不思議な体験をしただろう？あれは魔法の力なんだよ。」

ゼノンはあの場ではまだ考えがまとまつていなかつたので、伝えていなかつた事実をメイに伝えた。

「実はテーノとも話していたんだが、お前の周りには沢山の精靈が集まつていることに気がついたんだよ。お前は気がついていたかな？」

『セイレイ』？また知らない単語。

「精靈は、そうだね、この世界の中で実体を持つていなければ、どこにでもいるものだよ。ただ、その姿を見ることは稀なんだ。メイが感じた癒しの魔法は大木に宿つていた木の精靈の力だよ。」

「そうだよ、メイ。お前が来てから森の恵みを感じていたんだよ。あれもおそらく森の沢山の精靈の力だよ。それに庭に生えている草も、花々もどれも元気一杯だろ？あれも精靈の力である魔法が作用してると思うよ。」

ゼノンとテーノは、メイに今まで見てきたそれぞれの精霊の力を説明した。

メイははじめは田を見開いて聞いていたが、そのつい後に当たることをいくつも聞いてなるほどと納得した。

メイにしてみれば異世界であるここでおきることは何もかもがそういうものだと思ってしまいがちだったため、もとの世界ならば不可思議なことも子供らしい順応性の高さですっかり慣れてしまつてたことがいくつもあったので特にもづくにしていなかつたのだ。

「ほら、見ていいんだ。あのランプの光、やらゅら摇れてるね。でもちよつと面白いゆれ方だね。じつと田を凝らしていいんだ。お前にほりと見えるわ」

テーノが少し嬉しそうにランプのまつを指差しながら言った。

なんだらう?メイはテーノが見ていいんだ、といつからとは何かが見えないといけないのだろうし、その前に「セイレイ」がどうとかつて言つてたので、話の流れ的にこれは「セイレイ」をさしてるんだろうなあ。

メイはそのままがんばつてじつと見ていたらなんだか田が痛くなつてきた。メイがぱちぱちと田を瞬かせるとちよつと田をつぶる一瞬前に何かが見えた。

「あれ?」

田を開けるとまた消えていた。

「むむ?」

氣になる。すつじく氣になる。

「なんかいるみたいだけじ、田を廻る直前しか見えないよ。田また開けたら消えちゃつた。これがセイレイなんだよね？」

ゼノンはそれを聞いてにっこりと笑つた。

「ああ。それでいいんだよ。見ようとする見えない。見ていいないと見えない。それが精靈なんだよ。私やテーノが見れるのは幼いときから訓練をしているから。われらドワーフ族は火の精靈と地の精靈と触れ合つて、今の採掘技術や石の加工技術を磨いてきたからね。とはいっても多種族ほど彼ら精靈に依存はしてはいないのでよ。必要なこと以外には魔法は使わず、技術を磨く。それがドワーフ族のやり方だからね。」

「あの小さいのは私たちドワーフ族とは特に仲がいいやつらだから私も時々田にするけど、あんなに楽しそうにしてるのは初めて見るよ。」

「精靈を見るためには、まずここに精靈がいると自分で感じて認識することが大事だよ。」

メイは言われたとおりじつとランプのほうを田を凝らしながら見ていると何か動いたような氣がした。それでもよくわからない。ずーっと見つめてくるのにはつともわからない。

テーノはそこに精靈がいるって言つた。だからきっとそこに精靈はいるのに。

メイには見えない。何でだ？

「何で見えないんだろう？わたしには無理なのかな？つと残念に思いながらそれでも鼻がくつつきそうな位近寄つてじつと見ていたら突然火が大きくはぜ。」

メイは思わずしりもちをついてしまった。

「びっくりした！あ！見える！なんだか見えるよ。小さい子がいるのが見える！」

驚いたことが良かつたのか、突然精霊を目にすることができるてメイが大喜びした。

「ハハハ。そのこは随分短気なようだね。メイがなかなか見てくれないからこっちを見てくれと自分からサインを送つたんだよ。見ようとしても見えなかつたのに、精霊が見てくれつて言つて見えるようになるなんてなかなか珍しいね。」

メイはあまり褒められた氣がせずなんだかちえつと唇を尖らしてみたがそれでも精霊を見れるようになつた喜びには勝てなかつた。

「一度精霊を認識したならばこれからはいつでも見れるようになるよ。特に精霊の存在を信じて見ることが一番大事だからね。」

ゼノンはそう言ってメイの頭をなでた。

メイはゼノンに頭をなでてもらうのが好きだ。パパを思い出す。ゼノンを見上げてうれしそうにメイは微笑んだ。

それにしても、本来、精霊を目にすることはかなり珍しい。

魔力が高くとも精霊が見えるかどうかは相性があり、ドワーフや

エルフなどの妖精でも一部のものしか精靈を見ることは出来ない。ゼノンたちはメイが精靈を見れるようになるだらうことは彼女が精靈の愛し子であることから特に問題はないだらうとは思っていたが、また同時に彼女は違う世界から来たこともあります、もしや見えないこともあるかもしないとも思っていた。

メイは初めてみたその精靈に興味を持つてもう一度ランプのほうまで近寄ってみた。

ランプの火の中に真っ赤な服を着た小さな小指の先ほどの女の子がくるくる踊っている。

彼女は火の精靈にふさわしい燃え立つような赤い火でできた髪の毛をうねらせている。顔立ちは、白目がなく真っ赤な目をしていてちょっと勝氣そうに釣り目をしている。しかし目以外はあまり大きな特徴がない。そして体全体がぼんやりと光っている。

「その子は火の下級精靈だね。体も小さいし、あまりはっきりと姿が見えないね。」

テーノが興味深そうに精靈を見ているメイにそういった。

「なんだか精靈ってかわいいのね。あなたお名前は？」

メイがそう話しかけると火の精靈は不思議そうにメイを見つめ返してその後くるりと体を翻した。

「メイ、その子は下級精靈でもかなり下のほうだから思念波はつかえないし、精靈には個体としての意識はあまりないんだよ。だから彼らには名前はないんだ。」

ゼノンがそう説明した。

「名前ないの？ それじゃ、英語だけど、私の世界の言葉でその服の色、スカーレットはどうかな？」

「だめだ！ メイ！」

「メイ！ だめだよ！ おまえ名付け親になっちゃうよ！」

メイが名前をつけようとしていることに気づいて、一人はあわてて止めようとしたが遅かった。

メイは一人のあわてぶりにきょとんとしていたが、あまりに二人があわてていて困ってしまった。

(『すかーれっと』？ ナマエ？)

頭の中に響くように聞こえてきた声にメイが火の精靈のほうを振り向くと小指の先ほどの小ささだった彼女が今は手を広げた位の大きさにまで背が伸びている。

「え？ 大きくなったの？」

メイは驚いてゼノンたちに振り返った。
ゼノンとテークも驚いてしまった。

「もう、あんなに成長してしまったわ！」

テークが驚いてそうつぶやいた。

「困ったな。」

ゼノンはそういうと深く考え込んでしまった。

「わたし、悪いことしてしまったの？」

メイは一人の様子に困ったようにそういうと、火の精靈スカーレットを見た。

（ゴシュジンサマ、めい。ワルクナイ。すかれつと、めいダイスキ）

スカーレットはそう思念で伝えるとメイの肩の上に飛び乗った。スカーレットの真っ赤なドレスは先ほど布切れをただ巻いていたようなものだったの今はワンピースといつていいつくりになつており、顔立ちも大分はつきりとしていて表情もわかるようになつていた。その上、すでに思念波まで使えるようになつていて。

「メイ！ やけどしちまつよ！」

テー^ノは驚いてスカーレットを追い払おうとしたらスカーレットが怒つて火の力を増して今にもテー^ノに襲い掛かるつとしていた。

「スカーレット、やめて！ テー^ノはわたしの心配してくれただけだよ。ティー^ノも、わたしは大丈夫だから。スカーレットはちつとも熱くないよ。」

実際スカーレットはメイにはまつたく熱を感じさせなかつた。ティー^ノは疑わしそうにスカーレットを一瞥すると、恐る恐る手を近づけてみた。

「あつー。」

思わずティー^ノは大声を上げてしまった。少し手を近づけただけで、

やけどしあつにあつかった。

「テーノ！」

「大丈夫か？」

ゼノンとメイはあわてて声をかけると片手を抑えながらもテーノはにっこりと安心させるように微笑んだ。

「どうやら、ご主人様にのみ熱を感じさせないようだね。それにしてもこんな森の中でうつかりあちこちを焼いてしまわないように気をつけておくれよ」

メイがやはり大丈夫そうなのでそういった。

「「」めんね、テーノ。でもどうして名前をつけるのそんなにいけないことなの？」

まだ子供のメイにしてみれば小さな精霊はかわいらしい人形のようなもの。自分の人形に名前をつける感覚で簡単につけたのだが。

精霊はゼノンが言ったようにそのままで個としての意識はない。全体の中の一部。火の精霊は火の精霊としての意識しかなく、特に目的も何も感じていない。

ところが、名前を持つたとたん、精霊は個として独立しまう。

個となつた精霊はもう全体の一部としての精霊には戻ることは出来ず、常に名付け親と共に行動をしなければ今度は個としての存在意義を失い、もう全体の一部に戻ることも出来ないまま消えてしまう。

名前をつけられてから、精霊は新たな生活を余儀なくされてしまうのだ。

また魔力を全体の一部として受け取ることが出来ないため、個となつた精靈はそれからは常に主人となつた名付け親から魔力を供給してもらわないとこれまた消えてしまうことになるのだ。

つまり、メイはこれからこの小さな下級精靈を養うために魔力を常にあげないといけないことになる。

「だから、簡単に名付け親にはなつてはいけないのだよ。お前は幸い『精靈の愛し子』と呼ばれる、精靈に好まれるものであつたためにそれほど負担はかからないとは思うけど、無理に名付け親になつたりすると、自分の魔力を大半以上奪われて、日常生活に支障が出るものが殆どなんだよ。それ位、名付け親になることは自分の魔力を常に消費してしまうことになるのだからね。これから他に精靈を見ても簡単に名前をつけるのではないよ。」

メイは素直にうなずいた。下級とはいえ、精靈を養うための魔力の消耗は本来随分と激しいのだが、幸い精靈の愛し子であるメイは車とガソリンで言うところの燃費がよい器であり、このちっちゃな精靈を一人養う位実はなんともなかつたが、メイには魔力をきちんとコントロールする力がない。このままでは上手にスカーレットに魔力を渡すことが出来ないかもしれない。ゼノンたちにしても前例を知らないので、慎重に越したことはない、と思っていたのだ。

「お前がきちんと自分の中の魔力を制御できるようになればいくらでもお前が世話が出来る範囲で名付け親になればよいが。今までおまえ自身にとつても危険だが、精靈たちにとつても危険になつてしまふのだからね。」

ゼノンは内心、かなり驚いていた。

それにしても、精靈の愛し子とはすごい力だ。下級とはいえ、すつかり火の精靈を使役してしまつたんだから。そのうえ、下級精

靈を名づけだけで思念波が使えるほどに成長させてしまった。

それにあの小さなスカーレットはもうすでにメイを守るためにいつでも魔法を使おうとしている。あの子の周りの危険を考えたらこれは良かったのだろうか……。

下級とはいえ精靈は本来かなりの力を秘めているはずではあるが

……。

メイが魔力を制御できるように急がなければ。

第十六話 魔力

「ねえ、ゼノン、テーノ。わたしでも魔法つかえるようになれるかな？」

メイは今まで疑問に感じていたことを聞いてみた。目を期待いっぱいにきらきらと輝かせて二人を見つめている。すごくわくわくしているのが傍目からでもおかしくらいよくわかった。彼女は物語の中でも怖い魔法使いや魔女、それに妖精が魔法を使うのは知ってる。いつも本を読みながら自分もいつか魔法がつかえたらいいなつと夢見ていたのだ。

「うーん。私の目から見てもメイには十分魔力を感じるからね。訓練さえすれば魔法は使えるようになると思うよ」

テーノが少し複雑そうな様子でそういった。ドワーフ族のテーノにしてみれば魔法 자체は珍しいものではないが、便利な道具のような感覚で使用する人間のように魔法を考えることはできない。必要に応じて魔法を使用するのと、日常生活で便利に使用するでは魔法のありがたみがまったく違う。そういう感覚の彼女からしてみれば魔法が使えるからといってそれほどわくわくとするほどのこととは思えなかつた。

「メイ、私たちは魔力は高いが魔法を普段から使うことはないのは知っているね。火の魔法と土の魔法に関しては訓練しだいで使えるようになるものも多いんだ。だけどね、私たちはあえて日常生活には魔法を使わないようにしている」

「どうして？」

メイが小首を傾げてそう聞いた。

「魔法は私たちの生活を少し楽にしてくれるありがたい力だけど、それに頼りきつてしまふと今度は自分たちの本来の生活が大きく変わってしまうのさ。エルフや人間なんかは簡単に魔法を使って料理なんかしてるくらいさ。でも、料理が好きなお前ならわかるだろうけど、面倒がらずにおいしいものができるだるい」

「うん確かにそうかな。例えば……洗い炊きじゃなくて、きちんとお米を砥いだ後に水に十分つかせたほうがご飯がおいしこうにいづみに

「それに便利に慣れちゃ、味も素つ氣もないもんしかそのうち作れなくなるようなもんさね。急げ者のやる」とや

便利か。現代の日本なんか便利なものばかりなんだけどな。まあ、電子レンジでご飯を炊くより、炊飯器で炊いたほうがおいしいし、それよりもさらにおばあちゃんとこにあつたかまどを使って炊いた古いお釜のご飯はさらにおいしこうにいづみみたいな感覚かなあ?

半年ほど前に母について海外にしばらくすんでいたとき炊飯器の代わりに電子レンジ用の容器でご飯を炊いていたときのことを思い出していた。きちんと炊けることは炊けるけど、味がなんか物足りなかつたし、父方の祖母の田舎で昔ながらの釜で炊いたご飯は驚くほど大変だったけどすばらしく美味しかつたことも。とはい、確かに美味しかつたけど、メイはかまどをあえて用意して昔ながらのやり方で炊くのはさすがにやらないかななどとぼんやり考えていた。

圧力釜とかでおこしのできるし。

じつとそのやり取りを聞いていたゼノンがメイが自分なりの経験で理解をしただうことを感じて言葉を挟んだ。

「ともかく、魔法は使えるようになるだうけど、その使い方はよく考えることだ。それよりも前にまずお前は魔力を制御する方法を学ばないといけないな」

「魔力の制御? どうして? わたし別に魔力が暴走してるとかっていうわけでもないんだよね?」

「お前の魔力は安定しているよ。それ自体は別段かまわないんだが、お前が『精霊の愛し子』であることかが問題なんだ。精霊の力が近くにあるといつことはきちんと制御できていないとおまえ自身が外からの魔力の影響でひどい被害を受けてしまう恐れがあるんだ。外から受ける魔力もおまえがきちんと制御することで自分への影響を小さくすることができる」

「メイ、それからもうひとつ。精霊の名付け親になつたことを人に知られないようにするんだよ。できたら、精霊を人目につかないようにしといたほうがいいね」

テーノが真顔でメイにそう言った。

「どうして?」

「そうだね……。さつき、精霊の名付け親となることは普通は魔力の消費が激しくなるものはほとんどないといったがね、それなのに名付け親として精霊を回りにおいているものを他人が見たら

普通はゞいつ想ひと想つかない?」

「「フーん。それなら『精靈の愛し子』なのかもって思つかな?」

メイはスカーレットを手のひらの上に乗せていじりと見つめながらそう答えた。

「やうだ。実は『精靈の愛し子』は最近ずいぶんと危険な目にあつているらしいんだよ。」

「ああ。『精靈の愛し子』は人間族にはかなり低い確率でしか生まれることはないんだが、そのことを不思議に思つ『魔法使い』が、なにやらずいぶんと愛し子を多種族からわらつてているというわざがあるんだよ。特にエルフ族には『精靈の愛し子』が多いからエルフの者がほとんどとは聞くがね。幸いと言つていいのか、我等ドワーフ族にはあまり『精靈の愛し子』は生まれることはないのでな、あまり問題視をしていなかつたのだが……」

テーノに補足するよつこゼノンがそつため息をつくよつこ言つた。

「お前のことが心配だよ。うつかり魔法使いどもに見つかってさらわれてしまつたら……、お前みたいに可愛らしいのは何をされるかわかつたもんじゃない。いつも私たちがお前をみてやれるわけじゃない。そんなぼつつきれみたいに細つこい腕でどうやつて立ち向かえるのか……おや、一の月があんなところにきてるよ。もうずいぶん夜も更けてしまつたね。さあ、そろそろベッドに入ったほうがいいね。メイは名付け親になつてしまつたからには魔力制御を学ばないといけないということだよ。明日は早起きだ」

ゼノンに言われ、メイは眠そうにうなずくとスカーレットを左肩

に載せて、右手にはティディを持ってテーノに抱えられるまゝに部屋に連れて行つてもらつた。

第十六話 魔力（後書き）

あけましておめでとうございます。

いつも読んでくださっている皆様ありがとうございます。

今年もまたおつきあいいただけるとうれしいです。

ネット小説ランキング様より登録を解除いたしました。今までご投票下さった皆様、大変励みになりました。どうもありがとうございます。

第十七話 一人の心配

「それにしても、あの火の精霊の懷きようには驚いたな」

メイを寝かしつけた後、二人はまた先ほどのテーブルに戻ってハーブティーを飲んでいた。火の精霊は、ランプの光を消してしまつたので、見えなくなつてしまつたが、メイのそばにいるのだろう。

テーノは、先ほど眠そうなメイを抱えて部屋まで連れて行つた時のことと思い出して、小さく笑つた。

「どうしたんだい？」

ゼノンが聞く。

「いやね、私があの子を抱えて連れて行こうとしたら、はじめもうあの火の精霊が怒つてねえ。とはいえたし力もない下級精霊にあの子を運べるはずもないし。メイが言い含めるまであの下級精霊は私を威嚇しつぱなしさ」

「ほお？」

「それで、私があの子をやつとベッドまで運んで、明かりを部屋につけないとけないと、それまで手がふさがつてて持つてこれなかつた火種のこと気に回してゐる隙にさつさとあの下級精霊メイの部屋のランプに火をつけちまつて、ずいぶんと勝ち誇つた顔をしてくれたのさ」

テーノはまた思い出してくすくすと笑った。

ゼノンは、ドワーフ族と火の精霊の相性はいいとはいって、このように感情というものを持った精霊の存在と向き合うことになかったので興味が湧いた。あのスカーレットと名づけられた精霊は、もともとそのような性格をしていたのだろうか？いや、個としての存在がない。それの精霊に性格が備わっているとは思えない。ということは、名前をつけられたことによって自我が芽生え、性格が現れたのだろうな、と分析した。

「ふむ。精霊の自我の芽生え、か。興味深いな。あれはお前にやきもちを焼いていたのだな」

ゼノンもテーノに微笑んだ。

「それにしても、お前がわざわざ言つたとおりあまりあの精霊の存在を知られるのはよくないな」

ゼノンは先ほどメイにテーノが言つていた事を考へるよつとそつといった。

ただ精霊の名付け親になるとこつことは言つてみれば、精霊を見ることができるのである。誰にでもできることがある。しかし、精霊の愛し子でもなければ精霊の名付け親となることは魔力の消費量が非常に激しいためこの世界では常識として精霊の愛し子でもなければほほなるものはいない。小さな子供でも危険だと知っているのだ。

ところで精霊の愛し子であることと、精霊の名づけ親であることは名前だけを聞くと正反対のように思える。しかし、実際は名付け『親』になったと言つても、精霊にとっては愛しい『子』であるのは変わらない。まるで親が子を愛し、守りうとするように精霊は愛

し子を守らうとする。名付け親になることはその絆がむりに双方向として強くなることだった。

ちなみに精霊使いとなるには、まず絶対条件として精霊の愛し子であることがあるが、それだけでは精霊使いにはなれない。愛し子が名づけ親となる、もしくはすでに名がある精霊の真名で精霊を縛ることを第一条件とする。名づけ親になつた時点で精霊使いであると勘違いするものも多いが精霊使いになるにはさらに条件がある。とはいって、精霊の名づけ親であることと精霊使いの違いは、どちらも精霊を使役しているには変わりないが、前者が受身で精霊の恩恵を受けるのに対し後者は精霊を使役して魔法を己の意思で発動させることができるもののことについて。

メイは知らなかつたとはいって、名づけを行つて、精霊使いになるための第一段階を終えてしまつた。精霊使いになるためにはまずは名づけ、それにより、使役するための第二段階を終える。精霊の愛し子が名付け親になる場合は精霊のほうからの干渉により、名づけもスムーズに行われることがほとんどだが、そうでない場合は自身の魔力の負担が大きすぎ、苦痛も伴つ。

その上、精霊自身が干渉されることを恒常的に嫌がるためかなりの負担の割りに得るものはない。このことが精霊使いには精霊の愛し子であることが絶対条件になつてゐるのだ。

「そうだね、それに周りにはあの火の精霊だけではない。あれだけの精霊を周りにおいておくのはあの子にとつて危険だね。最近エルフ共が、金ほしさに精霊の愛し子を攫つて魔法使いどもに売りつけているなどという不穏なうわさも聞いているしな」

ゼノンは最近聞いた嫌なうわさに眉根をよせた。

「なんだい、それ、本当のかい？まさかエルフ族がそこまで堕ちてしまっているとはねえ」

テーノはそういうてこれまた嫌そうに頭を振つた。それから落ち着くように新しく淹れたハーブティーを一口飲んだ。

「メイのことがあの魔法使いどもにばれないようにしなければいけない。もちろん、エルフどもに見つかるわけにもいかないな」

メイの魔力制御をなんとかしないといけない。幸いメイはまだ幼い子供なので、制御の方法を学ぶのも問題ないだろうが、それでも少なくとも数ヶ月は訓練をしないと初步の制御もできないだろう。あの火の精靈を使役する必要がないならばゆっくりと時間もかけてもよいだろうが、魔力制御をしていないまま精靈とともにいるのは魔力の循環がうまくいかずメイにとつて非常にきけんだ。

「そういうえ、今日一人が帰ってきた後、森のほうから嫌な気配がしていたよ。なんだかじつと見られているみたいですぐに家に入つたけどね。あれはもしや……」

テーノがふと思いついたようにソラノンは驚いて彼女を見返した。

「何だつて？……もしそれがエルフ、もしくは魔法使いであった時は厄介だな」

「メイは生まれた世界に帰る方法を図書館で調べたいと言つて、トレーダーが次にいつ来るか聞いていたわね。まさかあの子、トレーダーと一緒に人間の国にいきたいわけではないわよね？」

テーノは恐ろしそうに肩をすくめた。

いくら人間族とよく似た容姿であるとはいって、この世界の人間族とメイは違うのだ。

それも人間族のうちの魔法使いどもは特に変わり者がほとんどでそのようなものにメイを預けることはまず考えられない。もしも人間の住む中原へいくらドワーフの信頼置けるものに任せると、そうでなければ自分がついていってあげたい。

ほとんどの中原の魔法使いどもは研究を第一の目的として他人の、特に異種族の者たちの都合など一切考えていないのではないかとうほど容赦がない。

最近のうわさでは特に精霊の愛し子達を各地から集めてきて、怪しい実験を繰り返し人間族の中にも精霊魔法を使えるものを増やそうと試みているようだ。

同じ人間族でもこのあたりにもよくやってきて比較的交流のあるトレーダーの話を聞いていても魔法使い共が随分と傲慢に振舞っている様子がわかる。

魔法使いどもにすれば中原を魔物たちから守っているのは自分たちだという思いがあるのかもしれないが、ここは中原ではないのだからその理論は通用しない。

しかし、もしメイが中原の人間族の国まで行きたいと言つ出したら…。

あの小さい娘には身を守るすべはまったくといってないだらう。

「魔法使いに近づけることは危険だよ。あの利益優先のトレーダー達にも会わせないほうがいいんじゃないだろうかねえ？」

テーノが心配そうにゼノンに聞く。ゼノンにしてもその考えには

賛成だが。今このままではメイには家に帰る方法が見つかることはまずないだろう。

人間族の国には大きな町がたくさんある。メイがいきたいといつてはいた本の沢山ある場所、図書館もある。ゼノンもまだ若いころには人間族の国まで旅をして、図書館も利用したことがある。そのためゼノンは自分の蔵書は一人が所持するにはおそらく世界でも有数というほどの量を誇るが、図書館の蔵書数には匹敵しないだろうことを良く知っていた。

調べ物があるならば、特に魔法に関しての調べ物ならば人間族の国だ。

それは良くわかっているが……。

「トレーダーはあまり信用できないとはいっても、もつとも新しい情報を持つていることも確かだ。メイにあわせるかはまだ置いておくとしても、最近何か変わったことがなかつたかは聞いておいたほうがいいだろうね。もしも人間の国に行くとしたらなおさらにな」

ゼノンはふうっとため息をついた。

彼には自分が人間の国まで旅をするには歳をとりすぎてしまつていることも、賢者としてドワーフの里から離れることもできないことも良くわかつていた。テークノにしても歳をとりすぎていることは同じであるし、彼女にしても身を守る術は殆どない。

「いや、トレーダーのことは今は置いておこう。大事なのはあの子の精霊の愛し子としてのあり方だよ。このままでは危険だけが増してしまつのは良くわかつている。うちに秘めた魔力を制御することができればあの子を守る精霊の力も増すだろう」

「制御の石がいるね」

第十八話 朝のひととき（前書き）

前々話、前話とサブタイトルを変更しました。
魔力制御についてなかなか思うように筆が進みません（いや、この
場合タイピング？が進まないと書くべきか……）

第十八話 朝のひととき

ドワーフ族のベッドはメイが日本で眠っていたベッドとはひょりと違う。むき出しの洞窟の土の上に木枠を置いて枯れ草をたっぷり積み上げてその上に被せるように大きな獣の毛皮を敷いて毛皮をかぶつて寝るのが一般的だ。メイがお世話になつているゼノン夫妻の家は森の中の家ではあるが、同じように草と毛皮で柔らかなベッドを作つてているのだった。

枯れ草を一定の間隔で取り替えないといけないという難点はあるが、その苦労を差し引いてもいつも気持ちよく眠れるこのベッドをメイはすっかり気に入っていた。テーノがいつも選ぶ草はとつともよい香りがして丁寧に手入れされたふわふわの毛の毛皮も本当に気持ちがいい。

メイは気持ちよべッドの中でいつものようにテーノに手を伸ばして起きようと思つていたら、ふと自分の鼻先に何かいることに気づいてうつすらと目を開けた。

(オハ三)

「……」

スカーレットがじつと自分の顔を覗いている。

「スカーレット！」

一気に昨日の晚のことと思い出してメイは思わずテディを取り落としてスカーレットをぎゅっと抱きしめた。テディが抗議するよう

な日をしている気がしたが今はスカーレットだ。

「おはよう、スカーレット」

メイは思わず抱きついたが、精霊というのにこれほど実体があるとはびっくりだ。テディみたいにやわらかくないが着せ替え人形ほど硬くもない。ちゃんと動いてしゃべって、抱きしめることもできて！まるでお人形さんみたいなのに！

乱暴にぎゅうっと抱きしめられてもスカーレットは抗議しない。

（オハヨウ、メイ）

昨晩寝る前に、ランプの明かりをつけてくれてから少しおしゃべりした。スカーレットは自我が生まれたばかりという意味ではまだまだ幼児のようなものといってよい精霊だ。思念波とはいえ言葉はまだまだ拙いがそれでも女の子のお友達ができるとつてもうれしかつた。

「あ、今朝は寝坊しちゃったみたい。スカーレットありがと」

窓の外を見るともう日が昇つてしまらくたつているようだ。メイは急いで服を着替えると、眠っている間にテーノが用意してくれていた洗顔用の桶で手早く身支度を整えて、柔らかな、ウサギに似た小型の動物のなめし皮で顔を拭いて軽やかな足取りで台所でまだ朝の準備をしているテーノのもとまで行つた。テディはいつものように邪魔にならないよう背中でバックパックとしてぶら下がつてあり、スカーレットもふよふよとメイの周りを興味深そうに飛び回つている。彼女はテーノが火を使うときは大喜びで自分で火をつけて得意そうにしていた。おかげでいつも使う火打石も必要がなくてテーノ

も喜んでいた。どうやらトーノーとも仲良くなつたようでメイはうれしかつた。

いつもどおり朝食はポリッジ。麦粥だ。はじめはメイは日本の朝御飯とは全然違つこの食事に少し戸惑つたが、体にもよくて蜂蜜とミルクをかけて食べるこの朝食はすっかり気に入つていた。このミルクは同じ森に住むヤルデさんのところで飼つている牛によく似た家畜の乳を毎朝ゼノンが散歩がてら分けてもらつてくるのだ。

メイも何度かついていったが、メイの知つている地球の牛よりもずいぶん小さく半分ほどで赤茶色の毛並みでとっても可愛かつた。牛までドワーフとあつたサイズでメイは初めてみたときびっくりしたものだ。このトルという牛に似た動物ははあちらこちらの家で一般的に買われている。牛乳ならぬ、トル乳の為に飼つているのだ。

美味しい朝食を食べて、後片付けを手伝つた後、ゼノンが魔力制御のことを教えてくれることになつていた。

第十八話 朝のひととき（後書き）

少しこの世界の日常を書いてみたくてこんな感じです。できるだけ、できるだけ矛盾が出てこないよう書いてますが、気づいた点がございましたら連絡いただけるとうれしいです。今回も少し短いですが次話の魔力制御、がんばって書いてますのでご容赦を……

第十九話 魔力制御の講義（前書き）

更新再開です。ペースまだ少し遅いですがどうぞよろしくお願いします。

第十九話 魔力制御の講義

朝のさわやかなすんだ空氣の中、木漏れ日がきらきらと降り注いでいる。ゼノンが今日は書斎ではなく、庭に置いている一番田のきこりの息子が切り出して作ってくれたずつしりとした深みのある色のテーブルで魔力制御について教えてくれている。

今日は珍しくテーノも一緒に。テーノは説明はゼノンに任せたのか、じつと聞いているだけである。二人分のハーブティーと、メイの為のさわやかな果汁の飲み物を用意したら少し離れたところで繕い物をすることにしたらしい。規則正しく動くテーノの針運びの音がかすかにゼノンの講義の向こう側で聞こえてくる。

「昨日話した『魔力制御』には道具を使用した外側からと、内側からの二種類の方法がある。まず、この魔力制御がお前にどうして必要かを説明するためにもう少し詳しく魔力について話してあげよう」

ゼノンはふと、ハーブティーを飲んでいた空のカップに水差しから水をいれ、持ち上げた。メイはおとなしくゼノンの前に座つて聞いている。バックパックのままでは背もたれで邪魔なテディは今はメイの左腕に抱えられていて、スカーレットはそれを意識してかいの右肩の上あたりをふよふよ飛んでいる。

「魔力が制御されていない状態はいうなればこのように椀にある程度溜まった水のようなものだ。人によつてその器の大きさの違いや、水の量の違いこそあるがね。そしてその器の水はそこにただあらだけでは風によつて表面が多少揺らぐことがあるつとも、基本的にどこにも動かない。そこまではわかるね?」

ゼノンがメイの数倍は太い無骨な手にカップを持ってメイを確かめるように見た。こくんとうなずくメイ。

「外部からの干渉 魔力だが、それが精霊によつてもたらされるのはその椀を激しく振るようなものだ」

ゼノンはそつういながら実際にカップを大きく動かした。中の水がそれにあわせてちゃぶんと揺れいくらかカップから零れ落ちた。テークがちらと頭を上げてゼノンを見るが、特に大きくこぼれたわけでもないのを見てまた繕い物に意識を戻した。

「そつうするとその椀の水はこぼれてしまう。つまり、精霊に干渉をされることがないならば、椀の水がこぼれることはないということで、魔力制御できないからといって普段別に問題はないということだ。しかしお前は『精霊の愛し子』であり精霊からの干渉は避けられない」

ゼノンはそこで一皿言葉をきつてからスカーレットを一警した。

「その上このスカーレットはお前に干渉しながら魔力を吸収しなければその存在が危うい。そこで、お前にはこの魔力制御が必要だというわけだ」

ゼノンがまたここまで理解できているかを確認するようにメイを覗き込んだので小さくうなずいた。

「これについては道具を使うことにより外からの干渉を、例えばこのように変えることができる」

ゼノンはそつういながら今度はカップを持った腕を大きく振り回

した。水は遠心力でこぼれない。

「水はこぼれない。お前は道具を使って外部からの魔力を震える
ように動く力から、腕を回す力に変える。そのように制御する」と
だ」

メイはじつと考えながら聞いていた。メイの周りをスカーレット
が飛び回っている。

「これが外部からの魔力の制御。お前にはすでに精霊が干涉をし
続けているのでこれでまず間に合わせないといけないんだ。だがね、
これはお前が倒れてしまわぬための応急処置に過ぎないんだ」

「干涉がこれ以上大きくなつたら道具では足りないとこり」と?

「そうだね。もちろんそれもあるのだが……」このようにカップを
振り回しているとき、お前はどうやって中の水を飲む?「

メイはゼノンに言われて怪訝そうにそのカップを見た。ぶんぶん
とうなるように太い腕を振るつているゼノンの手にあるカップの水
を飲む?

ゼノンはメイの顔を見ながら彼女が理解できたかを確認した。メ
イは少し考えるようになつむいていたが、ふと青い石の付いた首飾
りを見て何かに気づいたようになづいた。

「地球と同じ? 地球がぐるぐる回つても、太陽をぐるぐる周
つっていても、地上では動いてる気がしないし、物はそこそこじつと重
力で止まつてる」

メイはつまく氣づくことができてひどく満足をしつなづくのを、ゼノンは不思議そうに見ていた。

メイはいつたい何を言ひて居るんだ?「地球」とこゝのはメイの住む世界の名前ではないのか?そこはぐるぐる回つて居る?

「そつかー! だつたら精靈がカップに座ることができたらカップと一緒に回る精靈はあるでとまつてゐみたいに中の水を飲むことができるもの。だつたらわたしは精靈にカップに座る方法を教えてあげたらいいんだね」

混乱するゼノンをよそにメイは一人で納得していた。

ゼノンはメイがすっかり納得した様子なのが不思議だつたが、理解できているのなら今はそれでよいと考えることは後回しにした。それにしても、てつくり「そんなこと、できないよ」といわれるのを想定して今の話の流れを持つてきたかつただけに肩透かしを食らつたものだ。

「まあ、理解ができていたのならばよい。カップを振り回しているままのやり方ではカップの水を飲むことはできない。つまり、精靈はお前の魔力を吸収することができない。そこで精靈を訓練によりこの腕を振つているカップに着地できるようにするんだね。そうすれば精靈は好きなときに中の魔力を『静止』した状態で飲むことができるだろ? まあ、これはすべてたとえであつて本当にぐるぐると回すわけでもないので実際はもうすこし複雑なのがね」

ゼノンが冒元に笑みを浮かべてそいつた。

「まあ、それはおいといて、そのお前の精靈は生まれたばかりだ。

せめて中級程度の力と経験があれば自力で、カップにたどり着くことも可能だろうが、この子にはさすがに無理だろう。だからこの制御石による外部からの応急処置でお前を守りながら、おまえ自身の内部の魔力制御も行わないといけない。

「内部から制御することで魔力を循環させ、さらにはその流れに乗せて体外からも魔力を取り込むことが可能になる。カップの中にある水のままではメイ、精霊が必要とする魔力をいつかは使い切つてしまつだら」「

「魔力は枯れてしまつの？ 確かスカーレットは私からしか魔力補給を行えないのよね？ その元になるわたしの魔力が枯れちゃつたらスカーレットはどうなるの？」

「そうなるとその小さな下級精霊は存在を保つことができなくなつて消えてしまつだら」「

メイは思わず息を呑んだ。メイはもうすっかり心を奪われてしまつた可愛らしいスカーレットが消えてしまふかと考えただけで涙目になつてしまつた。スカーレットもよくわかつていないくせにメイのまねをして涙目でゼノンを見つめる。

「それならどうしたらいいの？ 内部の魔力制御ができるようになるまでもしわたしの魔力が枯れちゃつたら……？」

ゼノンはそのメイと小精霊の無意識の愛らしい行動にどうしたものが一瞬行動が止まつてしまつたが、向こうのテークからの「メイを泣かせるんじゃないよ」という無言の抗議の視線を感じて苦笑いを浮かべた。

「そんなに心配をすることはないよ。そのときは原石のままの魔石を使えばいくらかは魔力の補充はできるだろうね。どこかでおまえ自身が魔力の補給をしなければいけなくなつてしまつ」

「だがね、今のお前の魔力はそれほどたいしたものではないが、血液が流れるようにお前の中を循環するようになればその魔力はお前に強力な力を引き寄せ守つてくれるだろう。魔力の制御ができるようになれば力の強い精霊もお前をうつかり壊してしまつこともないと、ともにあらうとしてくれるだらうからね」

「それじゃ、わたしはまず、外からの魔力制御を行いながら、徐々に内側の魔力制御もしていかないといけないということね？」

メイはゼノンの説明を聞いて少しばかり魔力というものについてわかつた気がするが、まだこれではどうすればいいのかまではわからぬ。

「魔力制御にはまず制御するための道具 制御石 が必要なんだ。これをうまく加工すれば外側からの制御を行える。また制御石を身につけることで内側の魔力制御にもずいぶんと役に立つからね」

「制御石? どうしたら手に入るの?」

「制御石とは、魔物を討つた後にたまに手に入れることができる魔石を加工した形の石の一種だ。魔石は輝石と並んで大変高価だが、魔力を持つた魔石は特に魔法を使うものたちにとつて重宝がられている。制御石は、基本的に魔力の流れをコントロールするのに役立つ石で、持つているだけで魔力の流れが滑らかになる」

第十九話 魔力制御の講義（後書き）

できるだけ読みやすくしようと心がけていますが
今回は説明文が多くて読みにくかつたかもしれません。うまく伝わ
るようにかけていたらしいのですが……

メイとテーノは仲良く手をつないでドワーフ族の集落の中心地である大きな町まで歩いていた。日本の舗装された道になれたメイにはすでになんどか足を運んだこのほとんど獸道といつてもいいようなむき出しの土の道はとても面白かった。あちこちからリスやウサギに似た小型の動物が時々顔を出してしたり、色鮮やかな野生の花々がところどころ明るい日差しの当たる場所に咲いている。

木々の陰はひんやりとしていて30分ほど歩いてきて暖かくなつてきた体にはとても気持ちがいい。時々下級の風の精らしきかわいいつむじ風がメイに吹き付けているのも気持ちいいしどうやら歩くのが少し楽になつてゐみたいだ。ちょっとぴり恩恵を受けているらしい。

メイは見えるようになつた田で精靈をあちこちで見つけてうれしかつた。スカーレットみたいなおしゃべりはできないみたいだけどあちらこちちらで好意を含んだ目線を感じて、お友達ができたみたいで楽しいのだ。

今日はメイはテーノやゼノンがすごく興味を持つて見ていたお出かけ用のかわいい革靴は今は履いていない。テーノがメイの足にあわせて皮から切り出して作つてくれた膝下までのブーツを今はしている。歩くたびにゆれるかわいいビーズの飾りがとつても気に入つてゐる。いつものように背中にはテディが、そして今日はテディの外側のポケットにこつそりとスカーレットがかくれていた。何があるかわからないのでスカーレットのことは内緒なのだ。

服装は、テーノがまた新しく仕立ててくれた赤く染めた柔らかな皮のチュニックと、同素材の短めのスカートをはいでいる。テーノはなんでもないことのように言つていたが、この服を作るという工

程は、ただ買つてきた生地を型に合わせて切つて縫うというだけではなく、素材の加工から自分でほとんど仕上げてしまうという恐ろしく手間がかかる方法でいつも新しい服や靴などを作つてもうつたびにメイはすごく感謝していた。

「ママだつたらきっとすぐ興味持つただろうな

メイの母親は服のデザイナーだ。自分の小さな店も経営している。メイ自身も母親の影響で服飾には結構興味があつたので、テーノの驚くほど器用に動く手先をじつと見ているだけでため息が出るようだつた。

「ん? どうしたんだい? もう足が疲れたのかい?」

テーノがメイの視線に気づいてやさしく微笑んだ。テーノはいつもやせしくメイを見守つてくれている。

「大丈夫。町までもう少ししだよね?」

今日は朝、ゼノンが詳しく話してくれていた魔力制御のために必要な制御石の調達のために町まで向かうことにしたのだ。普段テーノについて買出しに行くときや、洞窟で働く鉱夫のおじさんやお兄さんたちの食事を運ぶときにもこの道を通るのでこのあたりにもだいぶ慣れたが、今日は町外れのテーノたちの息子さんの一人のところまで行くのだ。メイはまだ息子さんたちには会つたことがない。

「ああ。もうそろそろ門が見えてくるだろうよ。ほれあそこに見えてきた」

テーノに促されて見ると確かに向こうのほうに大きな門が見える。

町は高価な石を扱う店が立ち並んでいるのでしっかりと外敵から守る為に大きな塀で囲まれており、東・西・南・北と一箇所ずつ大きな門が設置されている。メイ達が通るのは東の門だ。東の門は特にエルフ族からの侵入を防ぐために魔法への防御に優れているらしいがメイにはいつたいどう違つているのかよくわからない。

ちなみに北は鉱山へ、西は海岸線へ、南は人間族などが住む中原への道が続いており、それぞれの門はいつも屈強なドワーフの兵たちが昼夜を問わず守っている。

ドワーフ族でも体の大きな兵隊を見てメイは「いつものことながらちょっとびり怖くなつてテーノの手をぎゅつと握つた。

「おやおや、メイはまだ兵隊さんが怖いのかい？」

テーノがやせこわいながら門番の兵士たちに配せした。

「メイちゃん、じんにちは。怖がらないでよ。おじさんたちはメイちゃんたち一般人を悪いやつらから守るためにここに立つてるんだからね」

強面の門番の一人がメイに声をかけてきた。よく見たら以前通つたときにも立つていた兵隊さんみたいだ。

「メイちゃんって言つのかい？ そういえばテーノさんとこに人間の女の子が滞在してゐつてけよつと前につわさになつてたけどそのこかい？」

もう一人の若者の門番も興味深そうにメイを覗き込んできた。そうなるとメイはすっかり恥ずかしいのと人見知りでテーノの後ろにかくれてしまつた。

「メイ、さあ、きちんと挨拶をしなさい」

テーノがそつと背中を押してくれた。

「……こんにちは」

少し声は普段より小さかつたけれどきちんと挨拶をすることができた。門番たちもニコニコとほほえましそうに見てくれていた。

「メイ、ちょっとこの人たちに話があるから見えるところで遊んでくれるかい？すぐに終わるからね」

テーノがメイにそいつてメイを門の中の安全な場所を指差した。メイはこくりとうなずいて門をくぐつて手近なところで腰を下ろして町の人並みを眺めることにした。

小人たちがたくさん歩いている。男の人たちはみんな長いひげを生やしており、人間と比べると少し大きめの頭と太い手足が特徴的だ。テーノが向こうで先ほどの門番と話をしているのが見える。

テーノはメイは少しほなれたところで人並みを楽しそうに観察しているのを見て安心してから門番の一人に向き合つた。

「実はね、メイを狙っている魔法使いだかエルフだかがいるかも知れないんだ」

門番たちは驚いた。

「何だつてあんな細つこい人間の子供なんか狙うんだい？いや、メイはもちろんかわいい、いいこだつてえのは知ってるがね」

テーノがぎろりとらむのであわてて言い訳をする。

「お前さんたちを見込んで伝えとくけどあの子は精霊の愛し子ですね。その狙つてるやつがこの町にもやつてくるかもしれないからしつかりと見張つてほしいんだよ。あの子は私たちがいつもついて守つてるんだがね、変な情報があちこちに飛びとけない。まあ、念のためだね」

テーノがそういうと一人はなるほどとうなずいた。

「ああ、愛し子か。人間が愛し子とは珍しいんじやないかい？まあ人間族のことはよく知らないがね。でもそれならあの子はやつぱり危険だらうね。よしわかつた。わしらもほかの兵士たちにしつかりと見とくよ」

テーノは礼をしてすぐにメイの元まで歩いていった。

第一十一話 錦糸の女（前編）

今回は工房でのマルスから見たメイとの出合いで場面。

第一十一話 師匠との子

その女の子はマルスがはじめてみる人間族の子供で、肩までのふわふわの巻き毛を揺らしてきらきらとした目でガドルとマルスの作る作品を眺めていた。師匠のガドルが“嬉しそうに”ひとつずつ説明している。

“嬉しそうに”？え？あの、師匠が？

背はドwarf族としては少し高めの身長の師匠と比べると頭ひとつ分以上小さい。これが人間族でなければ年頃のドwarfの娘と大して変わらない位だろう。でもこの子は丸くて小さな耳の人間族だ。大人の人間族の身長から考えて、おそらくまだまだ成人に程遠い幼い少女なのだろう。マルスが普段見慣れている小さなドwarfの女の子と比べるとこの子は随分と背が高くて子供と呼ぶのには微妙に違和感を感じていた。

また体つきがドwarfの頑丈で骨太な体型と比べると随分と華奢なためある意味どこかエルフの娘に見えないこともないが、エルフの特徴的な葉っぱのような形の耳も持つていないし、華奢だといつてもやつらのように異常に感じるほど体が細すぎるのはでもない。

マルスは人間族にはトレー^{トレイダー}ディングで来る商人たちに、細工師という仕事柄、ずいぶんたくさんあつたけれど、子供にあつたのは初めてだつた。

この子供、メイは母のテー^{ガドル}ノに連れられて師匠に会いに来たのだが、挨拶を済ませるともう工房のあちこちにある色とりどりの輝石や魔石、それを加工した細工物、その細工物を作る道具類などがどうやらかなり気に入ったようでうれしそうに見入っている。

それを見た師匠が、ぶつきあらぬうに少し言葉を添えてやると、うれしそうにその手をとつて「じゃああれは？じゃあこれは？」とかわいらしく質問してすっかり懐いてしまったよつだ。普段から気難しくて子供が怖がつて近寄つてこないのを実は寂しく思つていた師匠の心をあつとついう間にをつかんでしまつた。師匠はそのことを知られるのが恥ずかしいのか顔は何とか威厳を保とうと厳しそうな顔をしているが、それでも嬉しそうに手を引いて質問をしてくるメイについてい類が緩んでしまつている。

僕もメイが可愛らしい声で自分が作ったものに興味を持つて質問をする様子には思わず頭をなでてあげたいような気持ちになるもんな。

「おやおや。さきは兵隊さんが怖くて私の後ろに隠れていたのにガドルさんことはすっかり気に入ったみたいだね。どうだい、可愛い子だろ？」

テーゴが二ゴー口しながらメイとガドルの様子を見ているマルスに耳打ちした。マルスは突然話しかけられてびっくりしたけれど、確かにかわいい子だとちょっと想つていたのにっこりと微笑んでうなずいた。

「本当にかわいい子だね。このあたりでも人間の子供を父さんが森で拾つて帰つてきたつて最近うわさになつてたみたいだけど。聞くのと見るのでは随分印象が違つね。」

「おや、噂になつてゐるのかい？」

「ああ。やつぱりやつぱり子供なのに背はすいぶん高いけど顔はやつぱり幼いからアンバランスな感じだね。父さんが拾つてな

かつたらあつといつ間に森でくたばつちまつてたんじやないか、なんて言われてたからどんな貧弱そうな子供だらうと思つてたんだけど。」

マルスはそういつて改めてメイを見た。

「まあ、確かにあの細さはなんだかすぐに壊れてしまいそうだし。なんだかほつとけない感じだな。それにしても、あの愛らしい笑顔。種族が違つても可愛いいもんだね。」

テーノはいつも細工物のことばかり考へてるマルスが女の子のことに随分饒舌になつてゐるのに少し驚いた。

「でもお前、この子はゼノンが言つたのはつこないだままだ赤ん坊といつていいくらいの子供なんだからいくら成長の早い人間族だからつて変な事考へるんじやないよ。」

えー！テーノが半分本氣でそう口にしたのでマルスはかなり焦つてしまつた。

「母さん！ひどいな僕はそんなつもりで見ていたわけじゃないよ……。人間族の子供を、それも女の子を見るの初めてだからびっくりしちやつたんだよ。確かにびっくりするほど可愛い子だけど、いくらなんでもそれはないよ！」

ドワーフの女の子達に人氣があるのに女つ氣がない」の二男は真っ赤になつてすぐに否定した。テーノも別に本氣でそんな風に思つていたわけじゃないのでただうぶなマルスの反応に微笑んだのだった。

「でも、あの子すごいね。師匠を怖がらない子初めてみたよ。それに師匠があんなふうに子供好きなのもちつとも知らなかつたよ。大体師匠が近くに行くと小さな子供は普通すぐに泣き出しちゃうもんなあ」

マルスが気を取り直したように言った。

テーオはそれを聞くとくすくすと笑いながら「父さんだつてあの子にもう夢中だよ。」と、マルスに言った。

マルスはいくらなんでもそれは母親の冗談だつと思つて母と同じようにくすくすと笑つた。

「父さんが？まさか。父さんなんか、いつも本ばかり読んで他人に興味なさそうなのに。それも女の子に？」

テーオは同じような感想を息子に対しても少し前に思つたことを思い出して似たもの親子だものね、などとこつそり思つた。

「ああ。はじめはあの子の歳に見合わぬ賢さに興味を惹かれてたようだがね。あの子といふと知らずに笑顔になつてしまつのだ。最近じゃ、いつもの穴倉の書齋から出て森を一人で散歩することも多いんだよ。」

くすくすと笑いながらテーオがいつた。

マルスがあまり信じないのでテーオは先日、大木のある森の奥から帰つてきたときのゼノンとメイの仲睦ましい様子を話すとマルスは目を丸くして驚いていた。

そして、自分が仕立てた可愛らしい服を着てメイをほほえましそうに見ながらそう語るテーオの様子にメイが母のこともちろ

んすっかり骨抜きにしてしまつてこるよりうだと気づいた。

「そういうえば母さんも僕らが出て行ってからは随分寂しそうだつたけど、なんだかとつても楽しそうにしてるな。これもメイがそばにいてくれてるおかげなのかな？」

マルスは両親がこの小さな女の子の存在に随分と心を慰められている様子なのがうれしかった。

「ガドルさんも随分メイのこと気に入つてくれてるようで丁寧に説明してくれるね。あら、どうやら話もひと段落ついたみたいだよ。」

テーゴは話が一段落したようなのでガドルに話しかけた。

「ガドルさん、どうですか？」

ガドルはテーゴを手招いた。

「頭のいい子だね。一を聞いて十を知る。」

「そうでしょう。ゼノンもずいぶん感心してるんですよ。」

テーゴがうれしそうに答える。

「それにしても初めてだよ。テーゴに聞いてなきや気づかない程度の力だけど、いやあ驚いたね。こんなに沢山の種類の精霊が一箇所にいるとはね。」

ガドルは心配そうに眉根を寄せた。

「じゃあ氣をつけたまつがいいよ。最近では精靈の愛し子ますくなくなつてきたから見つかると厄介だ。うつかりとすると売り飛ばされてしまいかねないよ。」

ガドルが声を落としてマイに聞こえなによつていた。
これはテーク達も心配してることでもあつた。

「そ、うなんだよ。それもあつてね、今日は伺つたんだけどさ。」

ガドルが片眉をあげ、続きを促した。

「マイ、じつちおこで。」

第一十一話 霊取と女の方（後編）

やつ少し十房でのお話を続きをます。

第一十一話 小さな耳飾り

「わあ、メイこわいおいで」

テーノに呼びかけられてメイは少し名残惜しそうに手にとつて見ていたきらきらと輝く石がたくさん付いた首飾りを大事に置くと、とことこと大人たちのもとまでやつてきた。

「メイ、今日はなんでこちらにお邪魔することになったのか今話してたところだよ。さあ、ガドルさんにお前の精靈を見せてあげるんだよ」

テーノに言われてメイはこくんとうなずいて、バツクパツクの形で背負っているテテイから出てくるようにスカーレットにそつと呼びかけた。

「……」

スカーレットは少し警戒するよつとちよつとだけ顔を出してメイの顔を見た。メイがこくんとうなずくと、しぶしぶといった感じでメイの肩に登つて腰掛けた。

「火の精靈のスカーレットです。私のお友達になつてくれたの」

メイがそつとスカーレットの頭をなでると気持ちよさそうに手に擦り寄つてきた。

「そう、お友達か。それはいいな。火の精靈よ、メイのことによく守つてやつてくれ

ガドルがそう目を細めて言うと、スカーレットはつんと口を尖らせ腕を組んでそんなことは当然だと念話を送った。

「お？念話が出来る下級精霊とは。なかなか優秀なようだな」

ガドルはそういうと、ふむとうなずいた。そうしてしばらく考へるようになにか一つ一つ見つめていたがくるりときびすを返して奥の倉庫のほうに行つてしまつた。メイがだんだん心配になつてきた。ころガドルは何か小さなものをいくつか手にもつて戻つてきた。

「ほら、おれをつけてこいよ」

ガドルがメイに手渡したのは小さな耳飾りだつた。透明な石がひとつ付いただけのシンプルなものだ。マルスはそれを見て驚いた顔をしている。

「ガドルさん、でも、私、耳には穴を開けてないから……」

メイが困ったようにその耳飾りをみながら「穴？」そういつて一瞬ガドルはきょとんとした顔をしてテー^ノをみた。

「メイ、いっかくのよ」

テーノが心得たようにガドルから耳飾りを受け取りメイに見せてから耳に近づけるとピアスホールもないのにぴたりと耳にくっついた。耳飾りには針に当たる部分がなかつたのだ。いわゆる磁石で出来たもののようにぴたりと耳にくつついてもう離れない。キヤツチの部分もないがまったく落ちる気配はなかつた。

「え？ あれ？ これはどうやつていつの？」

メイが不思議に思つてそう聞くとガドルもマルスもびっくりした
ようにメイを見た。

「お前は今まで耳飾りを見たことがないのか？」

メイは意味がわからない。耳飾り、そうもちろんイヤリングはママがいつもつけていたし、見たことはある。だけど自分が知つてるのは耳に穴を開けてそこに通すものいわゆるピアスタイルのものか、もしくは連結した金具部分を後ろで固定して使うものやクリップオンタイプのものしか知らないといつとふたりはずいぶんと驚いていた。

テーノはそれを聞いてこの話はゼノンにしてあげないと、と心中でつぶやいてからメイを見た。メイの世界の技術力はすごい。手の込んだ作業をしないとそのような細かいものはできないだろうと感心する。だが単純にそのような方法で耳につけるというのが驚きだ。ピアスタイルは聞いただけで耳が痛くなっちゃう。こりや魔力を使わない技術というのもいいものばかりではないようだね。

「これはね、魔力を帯びた石なんだよ。体内の魔力と石の魔力が上手にくつつきあつからこいつやって落ちないんだよ」

異世界からやってきたというメイとはいつかやはり文化的、技術的に違うものがあつて当然なのだ。だからこいつやって説明をすることはテーノにとつては当然のことだったのだがガドルたちにしてみればなぜそんな基本的なことを説明してゐるのかとなる。

「この子はね、魔法を使わない場所からやつてきたらしこんだよ。

だから、魔法に関することはゼノンと一人少しずつ教えてあげてるんだがね、私らにしたら常識的に知ってるだろうってこともあるからさ。魔力石についてはまだほとんど教えちゃいなかつたんだよ」

「ふむ。魔法を使わない場所か。いつたいどんな場所なんだろうな。まあよいよ。とにかくメイは魔法に関してほとんど知らないといつことだね」

ガドルはそういうとメイにあげた耳飾りにそつと触れてそれからスカーレットを見た。

「お前にはこれだ」

ガドルは赤に光る「」つした石をひとつスカーレットに差し出すと、彼女は驚いたようにそれを見てあわてて受け取った。ガドルを見て真っ赤になりながらありがとうと思念をおくり、スカーレットはぱくっとその石を口に含むとそのままこくんと飲み込んだ。

メイはその様子にひどく驚いて、スカーレットを見てそれからガドルへどうこうことかと目を移した。

「どうだい、火の精靈よ。少しは楽になつたんじゃないか？」

スカーレットがうれしそうに自分の体をみてそれからにっこり微笑んだ。スカーレットの体が今までよりも少し鮮やかになつていてるが傍目にもわかつた。

「え？本当に？スカーレット楽になつたの？からだ辛かつたの？」

メイが心配そうにスカーレットを見ながらそういうと、今までじ

つと聞いていたマルスがにっこり笑つてメイの頭をなでた。

「そうだよ。メイはもう父さんから精靈は特に下級精靈は名付け親から魔力をもらわないと実体を維持できないというのは聞いてるかな？そう、良かった。今師匠がスカーレットにあげたのは魔石の原石のかけらだよ。魔力が特にこの赤い石は炎の魔力を純粹な形でもつているから君の精靈もすんなりと受け取ることができたんだ」マルスがそう説明するとメイはほつと胸をなでおろした。

「それじゃ、もうスカーレットは大丈夫なの？」

可愛らしく首をかしげるメイにガドルの頬が緩んだが、弟子が見ているのに気づいてこほんとひとつ咳払いをしてからメイに向かった。

「ああ。今マルスの言つたとおり、お前の精靈はすこーしづかり魔力不足をおこしておつたからな。お前がさつたと魔力制御を覚えんことにほこの子は恐ろしくてお前の魔力を吸収しそぎてしまうかもと躊躇しどつたんだろうよ。だがな今うちにあつた魔石のかけらを飲ませてやつた。これで少しは持つだろう。お前ががんばつて修行して魔力制御がじぶんで出来るようになればまあ、これからは石はいらんだろうが」

そういうつてガドルはもう少し持つていた魔石のかけらをメイに渡した。

「まあ、それまではこれではらを足してあげるとい。だがお前の魔力がこもつたわけではないから、その精靈にとつてはあまりうまいもんでもない。できるだけ急いで制御できるようにしてあげるんだ」

ガドルはそういうて大きくて傷だらけの手をぽんとメイの頭にのせてやさしくなでてやった。メイが気持ちよさそうに目を閉じてすこしきすぐつたそうにしているのを見てマルスはなんとなく自分に注意を向けたくて思いつづまま声をだした。

「ああ、その師匠がメイに贈ったこの耳飾りは魔力制御の力を持つ魔石を使っているからメイの魔力を体内でうまく流すのに一役買つていいんだよ。だから君の精靈は君の生のままで荒削りな魔力の流れに翻弄されることなくなつたんだ。少しずつ慣れていけば自分でその流れを調節してこの子に魔力をきちんと渡してあげれるようになるはずだよ。とりあえず持つているだけでも君にとつても体が少し楽になつたと思うがどうかな？」

メイが目を開けてマルスのほうを向いたのを師匠がちょっと物足りなさそうにしていたが。

「あ、本当だ！なんか不思議な感じ。少しからだが軽くなつた気がする」

メイがくるくる回りながらうつ言つたのを聞いてガドルはまたうれしそうに微笑んだ。

「どうか。役に立つてよかつたよ。それはそこにいるマルスが先日しとめた魔物からとつた魔石で作った制御石。制御石への加工は私がしたが、その形に整えて耳飾りにしつらえたのは実はマルスだ。練習作として作らせたのだがなかなか良いものができたのでな。お前が使つてくれるといいだろ？」

メイはそれを聞いてガドルとマルスに可愛らしくぴょこんと頭を

下げるお礼を言った。その瞬間にテディが背中でその存在を主張するように頭のほうにずれてきてテーノも含めて三人は笑ってしまった。

第一十一話 小さな耳飾り（後書き）

大変お待たせしました。感想を下さった皆さんありがとうございました」と「」
ざいます。家族が増え、毎日忙しく「」していましたのでなかなか
更新できず申し訳ないです。

これからも少しずつ更新していきますのでどうぞよろしくお願いし
ます。

第一二三話 狩り仲間（前書き）

お久しぶりです。

いつも読んでくれてありがとうございます。

第一二三話 狩り仲間

「マルス、お前も知らないうちに魔物退治なんかできるようになつたんだねえ」

テーノが先ほどのガドルの話を聞いてしみじみと微笑み、「うう、マルスは少し恥ずかしそうに笑つた。

「母さん、僕だっていつまでもまだ母さんたちと暮らしてた頃の幼いままじゃないんだし。このあたりの魔物退治くらい誉れ高きドワーフ族として当たり前だよ」

「いやいや、このマルスなかなかその方面でも筋が良くてな。私も最近は魔石が前より手に入りやすくなつて細工もいいものが出来るようになつてきたんだ」

ガドルが珍しくマルスをほめたのでマルスはまた恥ずかしくなつてしまつた。

「師匠もやめてくださいよ。ほめるのは出来たら細工物の仕事でほめてもらいたいなあ

「細工のほうは、まだ修行がいるな」

ガドルがにやにやと笑いながらううううと、テーノとメイが笑つた。マルスはそれで余計恥かしくなつて赤面しているのをちらりとメイは不思議そうに見た後、ふと気づいたように聞いた。

「マルスはどうやって魔物を退治するの？魔物ってまだ私見たこ

とはないんだけど、このあたりもたくさんいるの？」

マルスは話題を変えてくれたメイに感謝してこつこり微笑んだ。

「このあたりにはあまり魔物はいないよ。僕が狩りに行くのはここから少し離れたもつと中原よりのほうなんだ。僕はいつもこの横弓と槌を使うんだ。横弓はまあ、それなりの飛距離もでるし安全に狩りをするのに必須だけど、特に僕が狙つてる獲物をしとめるにはこの槌が有効でね。大きく振りかぶるから、もししとめ損ねたら隙がでて危ないんだけど、当たればかなりの威力があるからね。だいたい一、一撃でしとめることができるよ」

マルスは壁に立てかけている自分の身長と代わらないくらい大きな槌を指差して言ってからこんなことは小さな女の子に言うべきじやなかつたかと少し後悔しながらメイを見るとメイは真剣な表情でその武器を見ていた。メイはこの世界が自分の住んでいた世界と違うことを知ったときからずっとこの住み慣れたドワーフの集落をいつかは離れないといけないことを知っていた。このままここにいても帰れる見込みはないと思われるから。だから、旅をすることがどれだけ危険か知りたい。魔物ってどんな生き物なのだろう。どうやつて安全に旅をしたらしいのだろう。自分も武器を持って戦わないといけないだろうか……

「これ、『槌』つていうの？ とつても大きく重たそうだね……柄の部分が木で頭部はこれはなんかの石かな？ 持つてみてもいい？」

メイがそいつて槌に手を触れそうになるのをすんでとめると

「あぶないよ。落としたら君ペツちゃんになっちゃうよ。この頭部はかなり硬い特殊な鉱石で出来てるんだ。見た田代おり本当

に重いからね。君の細腕だつたら持ち上げられないから。ドワーフ族並みに力がないと難しいと思うよ」

マルスはそういって、ゆっくりと槌を差し出した。

「さあ、僕が支えてあげるから持つてみてごらん」

マルスに支えてもらいながらその木槌を持ち上げようとするが、メイがどれだけがんばっても槌は持ち上がりなかつた。メイの身長よりもさらに長くてヘッドの部分もずいぶんと大きいので仕方がない。

「マルス、今日は久しぶりに新鮮な肉が食べたいな」

ガドルがにやりと笑つてそういつた。

「そろそろトータウルが群れで移動する頃だらう」

テーノもそういってマルスを見た。

「……わかつたよ。トータウルなら一人では難しいな。ちょっと仲間を連れてくるから待つてて」

マルスには一人が言いたいことはよくわかつていて。トータウスの肉はゼノンの好物だ。せつかく魔石狩りの為に磨いた狩りの腕だが、たまには親孝行、師匠孝行するのも大事だしな……それに、母さんも久しぶりに大きな獲物を取りたいんだろうな……そんなことを思いながら、トータウル狩りをする為に友人を数人誘う為にして行つた。ガドルはマルスが出て行つたのを確認してからゆつくりしていつてくれといつて茶をふるまつてくれた後急ぎの仕事がまだ

残っているので失礼するよと断つて工房に戻った。

「テーソ、トータウルって何？」

メイがお茶を飲めないのでりんごのような実をテーソに剥いたも
らつて食べながら不思議そうにそう聞いた。テーソの説明を聞いて
いると、どうやらこの世界ではもつともポピュラーなタイプの大型
の食肉用に狩られる魔物らしい。メイは魔物が食べ物だとはちつと
も知らなかつたというと、魔力を体内に秘めている動物が魔物と呼
ばれているので、魔力がないものと別段肉は変わらないと聞いてび
っくりした。どちらかというと、魔力を少し含んだ肉の為、魔力の
補充にもいいらしく特に魔力を消費した後に好まれるらしい。とい
うか、メイも今まで結構いろんな種類の魔物の肉を夕食に食べた
と聞いてさらに驚いた。いつたいどれが魔物だつたんだろう……？

そういうしているうちにマルスが3人の同じくらいの年頃の若者
を連れて帰ってきた。一人はマルスと同じくらいの背の高さの若者
で大きな槍を持っていた。もう一人は少し大柄に見える若者で背中
にやはり槍を背負つて大きな台車をひいていた。そして三人目は意
外なことにほつそりとした女の子で背中には弓矢を背負つていた。

「テーソおば様お久しぶりです」

女の子がそいつ微笑むとテーソが驚いたように彼女を見た。

「あらあら、本当に久しぶりだね。コルンじゃないかい。見ない
間にまた一段と美人になつたねえ。アルナの若い時分にそつくりだ。
それから、お前さんたちはデミタにクルトじゃないか。大きくなつ
たねえ」

「おばさん、お久しぶりです」

「よく覚えてましたね。本当お久しぶりです」

テーノはコルンに話しかけた後、横にいた二人の若者にも微笑んだ。同じ集落に住むすべてのドワーフはみなよく知っている。デミタは体格がマルスとあまり変わらない方の若者で、以前に一度、ガドルに弟子入りしたくてこの工房で断られたこともあるが、今ではマルスともよいライバル関係となり細工の腕を競い合っている仲だ。魔石を採る時にはお互い協力して狩りをすることもよくあり、今回も魔石調達に一緒に行動こうと誘われたのだ。クルトはデミタと同じ工房で働くデミタの弟弟子に当たる若者で、デミタが行くところどこにでもついてくるのだが、実はコルンに気があるらしく、この三人が狩りをするときにはデミタをだしについてくるのだ。まだまだ狩りの腕も細工の腕も頼りないが体は一番大きく力もあるので運搬係として役に立ってくれている。因みにマルスにはすでに巣立った兄弟子はいても、弟弟子はまだいない。ガドルがなかなか採用しないからだ。

「紹介するね。この子は母さんたちが預かってる人間の子供でメイって言うんだ」

「ああ、可愛い子だろ。ゼノンもこの子をずいぶん可愛いがってるんだよ。さあ、メイ皆さんに挨拶するんだよ」

マルスとテーノに促されてメイが一步前にでた。ちょっとこわそうかなと思った大柄の若者も含めてみんなメイを見てにっこりと微笑んでくれたのでメイも少し安心して笑いかけた。

「初めてまして、メイといいます」

ぴょこんとお辞儀するのを、習慣が違うのか不思議そうに一瞬見

てから同じよしひ二人も頭を下げた。文化の違いが面白こと感じたみたいだ。

「メイ、よろしくね。私はユルンよ。あなたのことにあたりでも尊になつてたのよ。人間の女の子なんて見たことない人ばかりだからね」

ユルンがそういつて、メイに近づいてきゅっと抱きしめた。

「うーん、可愛いわ~」

小物などを扱う店で働くユルンはかわいいものは何でも好きなのだ。可愛い女の子ももちろんダイスキだ。

綺麗なお姉さんに抱きしめられてメイはちょっと赤くなつたが、悪い気はしなかつたので、というか、両親がいないのでこうやって抱きしめられるとちょっと安心するのでメイも抱きしめ返した。初対面なんだけど、このドワーフのお姉さんはふんわりと優しい雰囲気でメイもあつという間に打ち解けてしまった。ゼノンとテーソという年代の離れた人しか回りにいなかつたので余計に年が比較的近いだろうと思われるまだ若いドワーフのお姉さんがいることがうれしいのだ。メイの知るところではないが、ドワーフの少女なので実年齢は遙かに上である。人間で言うところの16・7歳程度であるといつておこづか。

第一二三話 狩り仲間（後書き）

皆さんもし違和感や誤字、脱字などに気づいたときはお知らせいただきるといいです。

第一十四話 巨大な魔物トータウル（前書き）

更新遅くなつて本当にごめんなさい。

応援してくださつている皆様、拙作をお気に入り登録してくださつている皆様、お待たせいたしました。

第一十四話 巨大な魔物トータウル

メイは大型の魔物というものを見たいと思った。そう言つと、危ないので駄目だと言われた。

「……どうしても、駄目ですか？」

「あのな、賢者様のところの客だからって何でも思い通りになると思うなよ。お前みたいな貧相なチビが付いてきても何の役にも立たないどこのか足手まといになるに決まつているだろう？」

クルトはメイのような弱弱しくて小さな子供はついてくるべきでないとかなりはつきりと反対を示した。メイは別段人間の子供としては細すぎるわけでもないのだが、彼らにとつて見慣れたドワーフの子供達のような頑健な体でないことは彼女の少し触れただけで壊れてしまいそうな外見を余計強調しているのだ。だからクルトはこのいかにも体力のなさそうなよそ者の人間族の子供などが付いてきて一行の行動を制限するのは迷惑だと思つて反対していた。

「おい、クルト！」

「ちょっとクルトつたら！」

マルスと、そしてユルンが珍しく声を荒げてクルトに抗議した。メイはクルトのようについ物言ひはこちらに来てこの方まつたくされたことがなかつたので大きな目を縁取る長いまつげがふるふると震えて、今にも泣きそつた顔をしていたからだ。

「今のは誇り高きドワーフ族の若者としてあるまじき配慮に欠けた言葉遣いだ。お前はもつとそういうところを直すべきだと思つぞ！」

マルスはどうでもいいのだが兄弟子のテミタにそう言われ、その上憧れのコルンにまで睨まれてクルトはぐっと押し黙った。

「まあ、待ちなよ。確かに配慮には欠けてたかもしぬないがクルトの言うことだって一理あるからね。メイだってちょっとびっくりしただけさ。な?メイ、そうどうう?」

テーノはそういうメイの顔を覗きこんだ。

確かに、久しぶりに聞いたきつい物言いにびっくりしただけだ。メイにしてみればそういうわれて当たり前のことだから。体がずっと細いことも、同じくらいの背丈のドワーフと比べてメイが格段に力が劣ることは前から知っていた。

メイは東京の両親の元に帰りたいとずっと思つてゐるが帰り方があまりたくわからぬ。ドワーフ族でもつとも知恵も知識もある賢者のゼノンでさえ異世界については知らなかつた。ゼノンがいうには実際にみてみないとわからないらしいが、人間族の住む中原にある大きな図書館ならば何か助けになる書物があるかもしぬないということだ。そうでなくともよく似た種族であるだろう人間族には会つてみたいと思つてゐた。彼らの中には魔法使いと呼ばれるものたちもいるがゼノンに教わつてメイは知つてゐた。彼らならもしかしたドワーフの賢者が知らないこともなにか知つてゐるかもしぬない。だからメイはいつか旅にでないといけないと思つてゐた。そのためにはこの世界の魔物とも向き合わないといけないときがくるはずだとわかつていたからだ。なんとか方法を探す為にこの世界のことをできるだけよく知りたいのだ。

メイがどういえば皆にわかつてもうかるだらうと考へてゐると驚

いたことに同じく反対すると思っていたテーソーが一緒に行くことに賛成してくれた。彼女の一言でメイもこの狩りのパーティーに参加できるようになったのだ。テーソーは別にメイがわがままを言つてゐるわけではないことを知つていたし、彼女がやることを何でも許すようになつたのだ。テーソーは別にメイがわがままを言つていいに甘やかしてはいたわけではない。ドワーフの子供もドワーフたちにとって貴重な労働力だ。別段メイがついてくることは問題に思つていなかつた。子供は狩りには参加できないが、大人が狩りをする様子を見て学ぶものだ。できるだけ危険に近づけないような心配りはするが大自然に生きるのに必要な力を付ける為にもこれは避けは通れないと彼女は思つてはいたのだ。メイはドワーフ族ではないがこれまでテーソーを手伝つて森での生活にも慣れてきている。テーソーはこの小さな頑張り屋のメイがずいぶんと我慢強く、賢くて、なんにでも一生懸命取り組むことをこのメンバーの中で唯一知つてゐる人物だつたのだから反対しなかつた。せつかくなので、メイができる手伝いをしてもらおうと思つてはいたし、大型の魔物についての知識が増えることも大切だと思つていた。

ドワーフの集落を囲む森を南東に向けて進むと、景色は唐突に変わる。そこまでずつとあつた緑の天蓋を抜け、メイが生まれ育つた東京の晴れていてもいつも曇天のような空とは大違ひの突き抜けるように青い大空が広がる草原地帯が拓けているのだ。メイは最近見慣れていた森の切れ間に見える空とは違ひ驚くほどその大自然に子供ながら感動していた。

(すごいな。空がとっても近く感じて変な感じ)

東京もそつたが、テーソーたちの住む森も高い木がたくさん立ち並んでいるので、広場になつてゐるところから見るとしても青空はほ

んの一部だ。

一行はその草原を横断するように流れる川に向けて歩いていた。川は集落の北の山脈から流れており、森を通りこの草原に流れるころにはずいぶんと大きな支流となっていた。中天に太陽が昇るまでにはいけそうなのでマルスはほつとした。メイを連れているのもあり、普段より移動に時間が多めにかかると予想したからだが、メイは驚くほど不満も言わず、しっかりと付いてきていたので助かつた。クルトはそれでもなにかこれからメイがしでかすのではないかと不審の目を向けていた。

メイは遠くに見えてきた土煙の中を移動する巨大な魔物たちを見て息を呑んだ。大きな角が一本その額から牛のように生えており、もつとも大きなリーダーだと思しき一体はなかでもひときわ大きく鋭く光るそれを誇らしげに掲げている。その長い角はおそらく、地球の象と変わらない位の体長よりもさらに長く黒光りしていた。体毛は黒。甲羅も光沢のある黒で、唯一、というか一つあるのだが、目は魔物特有の赤い色をしていた。

トータウルは普段は割りとばらばらに生活をしているのだが春から夏にかけてのこの時期のみ集団でこの草原の水場を求めて移動していく。丁度赤ん坊が生まれる時期だからだ。一体一体も硬いよろいのような体でできている為、そう弱い魔物ではないのだが、赤ん坊が生まれてくると種の保存の為、彼らは種族全体で弱い立場の赤ん坊と、出産で弱った母親達を守るために集団になるのだ。あまり高品質の魔石は取れないが、肉が大変柔らかくて美味しい為、どの種族も好んでこの魔物を狩る。この地帯はドワーフ族の領土の為、人間族の多い中原よりも豊富に獲物が残っている。人間族は自分の欲望のままに必要以上に魔物を狩る為に、このような有益な魔物も数が激減していると、テーノが歩きながらメイに教えてくれた。

「トータウルはあまり足が速くないのね。大きな甲羅のせいかな？」

メイははじめてみる大きな魔物をじっと観察していた。平原には遠くのものも入れると5つほど群れがあるが、一番近くに見える群れは数えて33頭。先頭をリーダーと思われる巨大な角の雄が走り、少し間をあいてその後を14頭の小さな、とはいへ一メートルはあるだろう角を持つメスのグループが子牛を連れている。母牛達に混じつて子牛は全部で6頭一生懸命走っているのが見える。そしてその雌や子牛を守る為か、まだ年若そうな雄が5頭つづき、その後、最後尾にはおそらく老年だろう体毛が灰色にくすんだ雄や雌たちが6頭少し遅れながら付いて来ている。魔物といつものあまり知恵のない生き物のように思つていたのだが、どうやら間違いのようだ。きちんと守るべきものを選別している陣形を組んでいるのだから。最後尾を行く老いたトータウルは、体の衰えと共に守る側から落ちたわけではない。万が一群れが襲われたときは生贊となり、他の群れのメンバーの生存率を上げる役割をしているのだ。

「あの群れを狙おう。できたら柔らかな肉の子牛を数等仕留めることができるといいが、危険だと判断したら老いたやつらでもいいだろう」

老いたトータウルの肉は筋張つており、肉も瘦せて脂分も少なく若い固体と比べてあまり美味しくはないが、危険性から考えると老いたものを狙つた方が容易い。一行は静かに群れの風下に移動しつつ、その群れを観察しつつ機会を伺うこととした。狩りは急ぐものではない。まずは計画を立てるところからだ。

第一十四話 巨大な魔物トータウル（後書き）

誤字脱字、おかしな表現など気づかれた方はご連絡いただけたうれしいです。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9776d/>

メイの冒険

2010年10月9日11時41分発行